

統合直後の南スラヴ人統一国家

材木 和雄

広島大学総合科学部

広島大学平和科学研究センター兼任研究員

A Short History of the First Yugoslavia: From the December Proclamation in 1918 to the Demise of Protic's Cabinet in 1919

Kazuo ZAIKI

Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Research Associate, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

Yugoslavia means a South Slav state. The Yugoslav idea is a creation of the nineteenth century and the work of Croat thinkers. The most influential ideologist was Bishop Josip Strossmayer of Djakovo (1815-1905). His final goal was to unify all south Slav

national units emerged after the breakup of Austria-Hungary with other south Slav states on equal terms, that is to found a federal south Slav state.

In twentieth century, the Yugoslav idea was inherited to the Yugoslav Committee which represented the South Slavs within Habsburg Empire during the First World War and sought after a unified state with Serbia in postwar period.

However, for long time, Serbian Government had not show eagerness for the Yugoslav idea. Because their national program was to establish the Great Serbia, unifying in one country the scattered Serb settlements of the Balkans, not to create a joint south Slav state, with the Slovenians and the Croats as their partner.

Nevertheless the south Slav unified state was realized in the long run. The continuing advance of Italian forces prompted a majority of the Zagreb National Council, the governing body of the ad hoc state of the former Austria-Hungarian south Slavs, to accept the Serbian regent's invitation to meet with him in Belgrade. Their representatives asked the regent Aleksandar to the unification and he proclaimed the Kingdom of Serbs, Croats, and Slovenes on December 1 in 1918.

However, the representatives of National Council did not negotiate a unification treaty with Serbian government at all. They took for granted that the autonomy of the local government in the former Austria-Hungarian countries was guaranteed. But the Serbian leaders did not think that they made such a promise.

The former Austria-Hungarian south Slavs soon realized that they had an illusion about the state, for it was quickly administered by old Serbia's army and bureaucracy according to old Serbia's constitutional and political models. That exacerbated the tension and differences among ethnic and social constituencies, typically those among the Serbs and the Croats.

1 はじめに

「南スラヴ人の国」を意味するユーゴスラヴィアは、主としてクロアチア人の思想家が提唱し、発展させた国家構想であった。たとえば、ユーゴスラヴィアという言葉を使い、南スラヴ人統一国家構想を最初に提唱したのは、19世紀後半のクロアチア人の政治指導者であったヨシプ・シュトロスマイエル司教（1815-1905）である。彼は、すべての南スラヴ人を独立で自由な国家的・民族的な共同体に統合することを最終目標とした。この共同体（ユーゴスラヴィア）は、各民族を完全に対等・同権の関係におき、各民族の主要な支配地域に国家としての自立性と自治権を保証する連邦制的な統一国家であった。

シュトロスマイエルの考えは20世紀のユーゴスラヴィア委員会の運動にも受け継がれていた。ユーゴスラヴィア委員会とは、第一次世界大戦中にオーストリア＝ハンガリーを出国した一群のクロアチア人、スロヴェニア人、セルビア人の政治亡命者が結成した政治組織である。彼らは、オーストリア＝ハンガリー支配下の南スラヴ人を解放し、セルビアおよびモンテネグロと統一国家をつくることを目的に連合国の間で情報宣伝活動を続け、南スラヴ人統一国家の実現に大きな貢献をおこなった。

しかし、オーストリア＝ハンガリー側の南スラヴ人が熱い期待を寄せていたにもかかわらず、セルビア政府は長い間、南スラヴ人統一国家構想に積極的な関心を示してこなかった。彼らがようやくオーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人諸地域との統合を現実的に考え始めたのは、第一次世界大戦中であった。とはいえ、セルビアの政治指導者にとって最大の関心事は、オーストリア＝ハンガリー帝国のセルビア人居住地域を併合し、セルビア民族国家の領土を拡大することであり、クロアチア人やスロヴェニア人を対等なパートナーと認めて合同国家を建設することではなかった。いいかえると、セルビア政府が実現させたいと考える南スラヴ人統一国家は「拡大セルビア」であり、シュトロスマイエルの連邦制国家ではなかった。

このため、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府とは意見がかみ合わず、両者はオーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人の代表権をめぐる激しく対

立した。それでも彼らは1917年7月にコルフ島で協議を重ね、カラジヨルジェヴィッチ王朝の下で立憲君主制の政体をもつ「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」を戦後に建国することで合意した。そして1918年11月には旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人代表とセルビア代表はジュネーブ協定を結び、過渡期の政府と国家のあり方を取り決めた。しかし、ジュネーブ協定はまもなく破棄された。この協定が前提とした連邦制的な国家制度の採用に対してセルビア政府側の抵抗が強かったためである。

だが南スラヴ人統一国家は流産にはならなかった。統一国家の形成をめぐる動きは、国内に舞台を移した。ユーゴスラヴィア委員会に代わって、ザグレブの国民評議会が一方の主演として登場し、ベオグラードのセルビア政府の代表と接触した。国民評議会は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人が分離独立を宣言して形成した「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の統治機構であった。彼らはセルビアとの国家統合を決議してベオグラードに向かい、セルビア代表と国家統合のセレモニーに臨んだ。この結果、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国が宣言され、南スラヴ人統一国家がついに実現した。1918年12月1日のことである。

しかしながら、このとき国民評議会の代表団は肝心な事柄をセルビア側と取り決めていなかった。国家統合後の国家や政府のあり方といった問題がそれである。彼らは、過渡期の期間では地方の政治的自治権が従来どおりに維持されることを求め、それはセルビア側も約束したと理解した。したがって、統一国家は少なくとも当分の間、単一国家ではあるが連邦制に近い内部構造をとると彼らは思い込んでいた。しかし、セルビア側はそのような約束をした覚えはなかった。これはそのとおりであり、実際に何の協定文書も存在しなかった。彼らはむしろ、セルビア側の国家構想が暗黙の承認を得たと考えていた。そこには大きな同床異夢が存在した。

セルビア側はこのあと中央集権化政策に邁進し、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人は当初の期待が幻想であったことを悟った。しかし、南スラヴ人の政治エリートが十分なコンセンサスを形成せず、国家統合を性急に実施に移したことは、その後にこの地域で起こった深刻な政治抗争と民族対立の主

発点を形成した。本稿ではユーゴスラヴィアとは何であったのかという問題を念頭に置きつつ、南スラヴ人統一国家の発足直後の経過と問題を明らかにしたい。時期的には、統一国家の最初の内閣の在任期間である 1918 年 12 月から 1919 年 7 月に至る過程を取り上げる。

2 統一国家の政府の形成

新しく発足した南スラヴ人統一国家にとって最初の課題は、国家制度の形成であった。この点に関しては、1918 年 12 月 1 日の国家統合のセレモニーの中で、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人代表は、セルビア王国側に次のような要望を表明していた。

第一に、統一国家の国家元首の任務は、セルビア国王のペータル 1 世ないしはその代行者として摂政の地位にあるアレクサンダル皇太子が遂行する。第二に、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域の全権代表組織である国民評議会は、セルビアおよびモンテネグロのすべての政党の代表と協議をおこない、統一国家を代表する政府ならびに国民議会を形成する。ただし、新国家をめぐる流動的な状況を考慮して、この国民議会は、総選挙の実施によって議員を選出するのではなく、国民評議会とセルビア諸政党の代表との協議に基づいて議員を選出する臨時の議会とする。政府は、近代的な議会政治の原則にもとづいて、この議会に責任を負うこととする。第三に、この臨時の国民議会は、憲法制定を目的とする議会が総選挙によって選出され、新しい政府が憲法と議会政治の原則で樹立されるまで存続する。第四に、現行の各地域の自治的な政府機構は、統一国家の政府の監督を受けて存続し、引き続き各地域の議会に対して責任を負う。

国家統合のセレモニーでは、このような構想を含む式辞を、国民評議会の副議長を務めるアンテ・パヴェリッチがセルビア王国の摂政アレクサンダルに向かって読み上げた。このあとアレクサンダルは答辞を読み、国民評議会の要望を受諾し、国家統合を宣言した。したがって、統一国家の統治機構の形成は上述の方針に沿って進められると国民評議会の代表団は理解し、その上で次の行

動をとった。12月3日、国民評議会幹部会は、滞在先のベオグラードから統一国家の樹立を正式に発表した。その声明の中で、彼らはこう述べた。セルビアとの国家統合が実現されたことによって、国民評議会は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域を領土として成立した「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の主権の担い手としての機能を停止する。さらに統一国家の政府が形成されれば、国民評議会は、現在セルビア政府との協議の上で遂行している行政的な機能をも停止する。

12月1日の国家統合の宣言は、統一国家を代表する統治機構として、国家元首、臨時の国民議会、臨時の統一政府を予定していた。このうち、国家元首の地位はセルビア国王の名において摂政アレクサンダルが遂行することは決まっていた。したがって、次に必要とされるのは、国民議会と政府組織の形成であった。議会と行政府の関係についていえば、南スラヴ人の政治指導者たちは、行政権を担当する内閣が議会の信任を在職の要件とする議院内閣制の採用で一致していたとみることができる。セルビア王国も旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域もそのような政治制度を採用していたからである¹。11月24日に国民評議会はザグレブで総会を開き、セルビアとの国家統合を決議したが、その際に合意された統合交渉の基本方針は、統治機構の形成手順として、まず国民議会を形成し、その上で政権の責任者を選出することを予定していた。より具体的にいえば、この議会は、国民評議会の全構成員およびユーゴスラヴィア委員会の5人のメンバー、セルビアおよびモンテネグロの議会が指名する一定人数の代表から構成される。新政府の内閣はこの議会のメンバーから指名され、国家元首によって任命されることになっていた。

しかし、12月3日に国民評議会が出した声明は、この方針に反して、国民議会の形成に先立って、統一政府の形成をおこなうことを伝えていた。国民議会はこの政府の発足後、遅くとも1ヶ月後に召集すると発表された。国民評議会の代表団は12人のメンバーを選び、セルビアの政府ならびに諸政党の代表との交渉にあたらせることにした。残りのメンバーはセルビアの首都ベオグラードを引き揚げた。

「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」とセルビア王国との

国家統合の宣言は、国民評議会代表団がベオグラードに到着して 3 日後に発表された。これに対して、統一政府の形成に関する協議の開始は遅れた。セルビア王国の代表と国民評議会の代表とが集まり、政府組織と閣僚の人選を始めたのは 12 月 12 日のことであった。セルビア側の代表は、首相のニコラ・パシッチ、ストヤン・プロティッチ（以上急進党）、マルコ・トリフコヴィッチ（急進党の分派指導者）、リュバ・ダヴィドヴィッチ、ミロラド・ドラシュコヴィッチ（以上独立急進党）、ヴォヤ・ヴェリコヴィッチ（自由党）、ストヤン・リーバラツ（国民党）、ミリヴォエ・ヨヴァノヴィッチ（進歩党）であり、国民評議会からは、議長のアントン・コロシェツ、副議長のスヴェトザール・プリビッチェヴィッチ、ヨシプ・スモドラカが参加した。なお国民評議会のもう一人の副議長であるアンテ・パヴェリッチは当初参加の予定であったが、党首を務めるスタルチェヴィッチ権利党の党大会のため、ザグレブに戻った。

話し合いには二つのレベルの意見対立が伴った。一つは、国民評議会の代表とセルビア側の代表との対立であり²、もう一つはセルビアの政党間の対立であった。後者は、与党の急進党と野党との政権をめぐる主導権争いを基軸としており、第一次世界大戦以前から続く因縁があった。しかし、協議の参加者は、次の点では異論がなかった。それは、最初の政府は、国民評議会に参加している全政党とセルビア王国の全政党を代表する挙国一致政権でなければならないこと、この政府は来るべき臨時国民議会に責任を負うこと、この政府には主要三民族の代表だけでなく、主要三宗教（カトリック、正教、イスラム教）の代表者が含まれることであった³。

最初の大きな問題は、新政府の首相を誰にするかということであった。国民評議会の代表と急進党の代表は、セルビアを率いて戦争を戦い抜いた実績と国外における知名度の点から、新政府の首相は、ニコラ・パシッチをおいてほかにないと主張した。これに対して、セルビアの野党代表のダヴィドヴィッチは、大戦中のパシッチの政権運営やユーゴスラヴィア委員会との対立および大セルビア主義的志向を問題にして、パシッチの就任に反対し、首相は政党外の中立の第三者にすべきだと述べた。しかし、ダヴィドヴィッチは具体的な候補者案をもっていたわけではなく、強力な人物が必要だという国民評議会代表の強い

後押しもあって、結局ダヴィドヴィッチもこれを許容し、パシッチを首相にすることで全員が同意した⁴。

激しい議論の対象となったのは、外相と内相のポストであった。セルビアの与野党の代表は事前の話し合いで、セルビア王国の駐イタリア大使ミハイロ・リスティッチを外相に推薦することで折り合っていた。彼らは国民評議会側に話し合いの経緯を説明し、政党間合意の尊重を求めた⁵。しかし、国民評議会代表のヨシブ・スモドラカは、大方の予想に反してユーゴスラヴィア委員会議長のアンテ・トルムビッチを外相候補者として推薦した。これには急進党のプロティッチがすぐに難色を示した。トルムビッチのユーゴスラヴィア委員会とパシッチのセルビア政府は、第一次世界大戦中に旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人の代表権をめぐる激しく対立した経過があり、両者の不仲は連合国の間でもよく知られた事柄であった。プロティッチは、この事実を指摘して、パシッチにトルムビッチの入閣を受諾させるのは不可能だと述べた。これに対して、スモドラカは、だからこそパシッチとトルムビッチを挙国一致の政府内におくことで二人に協力を促し、民族間の団結と政治的成熟を内外に示すべきだと主張した。それにトルムビッチは、イタリアとの国境画定交渉を最大の懸案とする外相の任務に最適の人物である。なぜなら、トルムビッチは誰よりもこの問題を熟知しているからである⁶。このように述べて、スモドラカはその主張を譲らなかった。スモドラカの主張をセルビア野党代表のダヴィドヴィッチが支持し、国民評議会代表のプリビーチェヴィッチとコロシェッツもこれに同調した。結論は翌日の会合に持ち越しになり、協議は決裂の可能性さえあった。しかし、最後にはパシッチが国民評議会側の要望を尊重すると述べて、スモドラカの提案に同意したため、トルムビッチを外相とすることが決まった。なおトルムビッチはクロアチア人であり、首相のパシッチはセルビア人であることから、三民族のバランスを勘案して、スロヴェニア人のコロシェッツを副首相のポストに処遇することも決まった⁷。

内相のポストもセルビア側代表と国民評議会代表の間で大きく意見が分かれた。セルビア側は、内務省は警察組織を統轄し、選挙の管理を担当することから、内政に関して内相は最重要のポストであるとみなしていた。そこで、セル

ビアの与野党の代表は、このポストは是非ともセルビア側に確保しておかなければならないと考え、急進党にも野党にも距離を置くマルコ・トリフコヴィッチを内相に推薦することで事前に話し合いがっていた。トリフコヴィッチは法律家であり、新国家に含まれる多様な地域の法律や法令を処理する仕事にふさわしいというのが推薦の理由であった⁸。

これに対して、またしても国民評議会側のスモドラカが対案を出した。スヴェトザール・プリビーチェヴィッチを候補者に推薦したのである。スモドラカの弁によれば、プリビーチェヴィッチは、セルビア人魂をもったセルビア人であると同時に「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者としてクロアチア人の信任も厚く、セルビア人とクロアチア人との橋渡しをする仕事には最適の人物である。それに新政府の内相は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人の事情に詳しい者でなければならない。この地域にはこのたびの国家統合に対して不満や反対の考えをもつ者もあり、彼らの動きが国民統合の障害になった場合、内相はこれをあらゆる手段を尽くして排除していく必要がある⁹。したがって、この地域の事情に疎い旧セルビア王国の出身者では内相の仕事は務まらない。スモドラカはこのように述べて、プリビーチェヴィッチを強く推薦した。これに対して、ダヴィドヴィッチはなおトリフコヴィッチの就任にこだわり、セルビアの与野党間の合意を尊重するように求めたが、スモドラカは、セルビアの政党間の合意よりも、セルビア人とクロアチア人の民族間関係の方が重要であると反論した。議論の末、今度はパシッチとプロティッチとがスモドラカの主張を支持する側に回ったため、セルビアの与野党間の結束は崩れた。この結果、プリビーチェヴィッチの内相就任が決まり、トリフコヴィッチは法相のポストに回った¹⁰。

このほかの閣僚ポストは特段の問題なく決まった。18人の閣僚の民族的な内訳は、クロアチア人4人、スロヴェニア人2人、旧オーストリア＝ハンガリー領出身のセルビア人1人、旧セルビア王国のセルビア人8人、ムスリム人1人であり、さらに民族帰属を明らかにしない社会民主党員1人、セルビア王国軍の将軍1人であった。まもなく各地域の新聞が閣僚の候補者名簿を報道し、諸民族や地域間のバランスを考慮したものであることを伝えた。

12月15日、首相候補者のニコラ・パシッチは、摂政アレクサンダルに謁見した。旧セルビア王国では首相の任免権は国王にあったからである。皇太子のアレクサンダルは老齢の国王に代わり元首を代行する地位にあった。彼は閣僚の候補者名簿を提示し、裁可を請うた。しかし、予想に反して、アレクサンダルは裁可を拒んだ。それどころか、アレクサンダルはパシッチを次のように詰問した。なぜモムチロ・ニンチッチ（アレクサンダルの側近）の入閣を考慮しなかったのか。なぜジュネーブで結ばれた協定に対して摂政が裁可をしなかったとセルビアの野党代表に述べたのか¹¹。なぜ野党指導者が自分（アレクサンダル）に送った電報を秘匿したのか。これに対して、パシッチは、アレクサンダルの指摘はいわれのない非難であるとし、摂政には誤った情報が伝えられていると答えた。パシッチは、もし自分が述べたことよりも他人が述べたことを摂政が信じるのなら、いつでも身を引く用意があると述べた。アレクサンダルは、それこそ自分がパシッチに期待していたことだと答えた。こうしてパシッチは首班指名を辞退せざるを得なくなり、翌16日、これを文書で伝えた¹²。

アレクサンダルの行動は国民評議会の代表に衝撃を与えた。プリビーチェヴィッチは翌日すぐにアレクサンダルに謁見した。プリビーチェヴィッチは、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人政治家とセルビア王国の政治家が歴史上初めて結んだ政権協定に異を唱えるのはクーデターに等しいとまで述べてアレクサンダルの翻意を促したが、無駄であった。アレクサンダルは、パシッチのその他の不行状を指摘して、彼とは一緒に仕事はできないと主張して譲らなかった¹³。もっとも、アレクサンダルの主たる目的はパシッチを排除することであり、急進党指導部との対立にまで発展させる意図は彼にはなかった。ところが、アレクサンダルの恣意的な行動は、誕生したばかりの統一国家に最初の政治危機を引き起こした。セルビアの野党は、急進党党首のパシッチが首班指名を辞退した以上、野党党首のダヴィドヴィッチが組閣責任者に指名されるのではないかと期待した。しかし、急進党指導部は、首相候補者が急進党から選ばれない場合には政権に参加しないという態度を示し、国民評議会の側もセルビアの全政党の代表が参加する連立政権が成立しない場合には政権に加わらないことを表明した。統一国家の政府が成立しなければアレクサンダル自身がそ

の責任を問われ、王位継承者の地位を追われる可能性があった。このような状況をみて、アレクサンダルは、急進党ナンバー・ツーのストヤン・プロティッチを首班指名し、組閣にあたらせた¹⁴。

12月20日、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の最初の内閣が成立した。最終的な閣僚の数は18から2人増えて20となり、若干の人的な差し替えも付け加えられた¹⁵。地域別・政党別にみると、旧セルビアおよびモンテネグロ側は10人の閣僚を出した。内訳は急進党3名、独立急進党2名、急進党分派指導者1名、自由党1名、進歩党1名であり、このほかにモンテネグロから1名、セルビア王国軍の将軍1名であった。旧オーストリア＝ハンガリー領の側も同様に10名の閣僚を出した。内訳は、クロアチアおよびスラヴォニア4名（うち「クロアチア人・セルビア人連合」2名、スタルチェヴィッチ権利党1名、社会民主党1名）、ダルマチア1名、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ3名、スロヴェニア2名（スロヴェニア人民党1名、ユーゴスラヴィア民主党1名）であった。統一国家の主要な政党の中で、閣僚を出していない政党は、君主制に反対するクロアチア大衆農民党とセルビア共和党だけであった。

なお注目されるのは、統一国家の新政府の任命は旧セルビア王国政府の総辞職の承認と同時におこなわれたことである。すなわち、摂政アレクサンダルは、同一の勅令の中で、旧セルビア王国のパシッチ内閣の総辞職と、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」のプロティッチ内閣の任命を承認した。アレクサンダルの勅令はその際、プロティッチ内閣を新しい国家の政府であるとはみなしていなかった。プロティッチ内閣は手続き上、パシッチ内閣の後継内閣であり、セルビア王国政府の交代として扱われた。セルビアの政治指導層にとっては、統一国家の政府はセルビア政府が名称を変更したものにほかならず、セルビア政府と別個に存在する新しい政府などありえなかった。このことは、アレクサンダルを始めとするセルビアの政治指導者が新国家を新しい形成物ではなく、拡大したセルビア国家だとみていたことを意味するものであった¹⁶。

3 中央政府と地方政府との関係

統一国家の全領域の行政を担当する政府が成立したことによって、国民評議会は、暫定的に続けていた旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の中央行政政府としての機能を停止することになった。1918年12月28日、国民評議会は正式に解散を決定した。この結果、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の組織は完全に清算された。しかし、旧オーストリア＝ハンガリー領の各地域には、地方行政政府が残っていた。それらは、リュブリャーナのスロヴェニア国民政府、ザグレブのクロアチアおよびスラヴォニア地方政府、ダルマチア地方政府、サラエヴォのボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府、ノヴィ・サドのヴォイヴォディナ国民行政政府であった。オーストリア＝ハンガリー帝国は、これらの地域単位に一定の自治権を認めていた。それぞれの地域は立法機関として議会をもち、地方政府はこの議会に責任を負っていた。このような地方自治の制度は、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊後に誕生した「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」も統治の前提としていた。

このうち、ザグレブにあったクロアチアおよびスラヴォニア地方政府は、他の地方政府と地位を異にしていた。クロアチアおよびスラヴォニアは、旧オーストリア＝ハンガリー領内のスラヴ人地域の中で国家に準ずる地位を認められていた唯一の地域であったからである。正式の名称は「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア三位一体王国」と呼ばれ、国王はオーストリア皇帝が兼任していた。1867年にハプスブルク帝国がオーストリア＝ハンガリー二重帝国に再編された際、クロアチアおよびスラヴォニアはハンガリーの実質的な支配下におかれる地域になったが、クロアチア議会はハンガリー政府と協定を結び、自治王国としての地位と内政上の政治的自治権を認めさせてきた。

第一次世界大戦後の内外の混乱、とりわけイタリアの侵略に対する恐怖を背景に、南スラヴ人の政治指導者は、自分たちの安全保障をセルビアとの国家統合に求めるようになった。しかしながら、上述の歴史を背景に、南スラヴ人の政治指導者、とりわけクロアチア人の政治エリートは、自治権の確保に強い執着をもっていた。クロアチアは国家的地位を認められてきた地域であるから、セルビアとの国家統合に際しては、クロアチアには、一定の自治権とセルビアとの対等性が確保されなければならない。国民評議会に代表を送ったほとんど

の政党の指導者はそう主張した。彼らがもっとも危惧したのは、セルビアが支配権を握る国家が誕生することであった。国民評議会のメンバーは、治安情勢の悪化に危機感を抱いてセルビアとの国家統合をあわただしく決定したが、それでも新しい国家がセルビアに飲み込まれ、クロアチアの自治権が否定されることにならないように、この国家統合に重要な条件を付けた。これが「ナプタク（指針）」と呼ばれた付帯決議である。国民評議会の代表団は、この決議に示された方針に沿ってセルビア政府と、国家の統合交渉をおこなうことが義務づけられた。

国家組織に関しては、「ナプタク」は、次のような事項を規定していた。統一国家の最終的な国家組織は、憲法制定議会構成員の3分の2の賛成によって決定する。憲法制定議会は和平協定が成立後、6ヶ月以内に召集される。(第1項)。臨時の中央政府は、首相、各行政分野の閣僚、7名の地域代表(セルビア、クロアチア・スラヴォニア、スロヴェニア、ダルマチア、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ)から構成される(第7項)。中央政府は、外交、防衛、財政、郵便・電信を担当し、その他の行政は地方政府が担当する(第8項)。地方政府の自治に委ねられた行政事項は各地域の議会が監督する。地方政府には長官をおき、ザグレブでは総督(バン)がこれを担当する(第9項)。政府は、国家財政の枠組み内で必要な財政手段を地方政府に割り当てる(第10項)。経過期間においては、これまでの法律・法令、行政・司法制度、地方政府機関はすべて有効とする(第11項)¹⁷。これらを要約すると、憲法制定議会が最終決定を下すまでの期間は経過期間であり、統一国家の政体や国家制度は、あくまで暫定的なものとする。臨時の中央政府は、統一国家としてどうしても必要な共通事項を担当し、それ以外の事柄は従来どおり地方自治に委ねる。これが11月末の時点で国民評議会が構想していた過渡期の統一国家像であり、それは地域的に高度の政治権力を保障することを前提としていた。

このような経過から、12月1日の国家統合のセレモニーにおいて、国民評議会を代表してパヴェリッチが読み上げた声明文の中では、現行の各地域の自治的な政府機構は、統一国家の政府の監督を受けて存続し、引き続き各地域の議会に対して責任を負うことになっていた。クロアチアの国内でも地方自治の存

続に対する期待が支配していた。たとえば、12月3日付けの『リエーチ』(クロアチアの最大政党「クロアチア人・セルビア人連合」系の日刊紙)は、新政府には18の閣僚ポストがあり、このうち6つはそれぞれ共通事項(外交、防衛、財政、海洋、鉄道、郵便・通信)を担当するポストであり、残りの12のポストは中央政府と地方政府の関係を維持するポストとなるという観測を伝えていた。同紙は翌日、この12のポストには地方政府の代表が就任すること、中央政府と地方政府の行政を間に立って調整するために補佐官のようなポストが設置されることを続報した¹⁸。

ところが、国家統合直後の12月3日、ベオグラードに滞在中の国民評議会の代表団は、中央政府のあり方や地方政府との関係について、従来とは違った方針を決定していた。それは、一部の共通事項についてのみ中央省庁を置くのではなく、統一国家の全分野の行政事項についてそれぞれ中央省庁を設置すること、中央政府と地方政府の行政を間に立って調整する補佐官は不必要であり、設置しない、中央省庁と地方政府の間で争いが生じた場合には閣僚会議で最終決定し、この決定には国民議会に責任を負うというものであった。さらに国民評議会代表団は、中央政府と地方政府の争いを解決するために中央行政裁判所を設置すべきだという提案を披露していた¹⁹。

国民評議会代表団の決定は、中央集権的な行政府の設立を意味していた。ベオグラードに出発する前に決められた国家統合の基本方針(「ナプタク」)にしたがえば、国民評議会の代表は、セルビア側との臨時政府の設立交渉に際して、中央政府の組織や権限、地方政府との関係を当然、協議の事項として提起してしかるべきであった。しかし、すでに述べたように、12月12日に始まったセルビア側代表と国民評議会代表との話し合いでは、議論に時間が費やされたのは「誰を閣僚にするか」という問題だけであり、政府機構そのものをどう組織するのかについては議論の対象にすらならなかった。協議に参加した国民評議会の代表もセルビア側の代表も中央集権的な行政府の設立を暗黙の前提としていたからであり、その背景には国民評議会の代表の重大な方針転換があった。

それでも国家統合の直後には、なお楽観的な雰囲気はクロアチア国内では支配的であった。興味深いのは、12月11日付のクロアチアの日刊紙『オブゾル』

が掲載したアンテ・パヴェリッチへのインタビューである。スタルチェヴィッチ権利党の党首であり、国民評議会副議長のパヴェリッチは数日前までベオグラードに滞在し、ザグレブに戻ったばかりであった。インタビューの冒頭、パヴェリッチは、ベオグラードのセルビア人にはセルビアの覇権の樹立、つまり大セルビア主義国家を創ろうというような野心は感じられなかったと述べ、国内の政治家の懸念は杞憂であったことを強調した。新政府の組織については、パヴェリッチは次のように語った。諸政党の連立政権として形成される中央政府は、たしかに統一国家の全分野の行政を担当するが、セルビアに対してはセルビア政府が行政を担当し、クロアチアおよびスラヴォニアに対してはザグレブの行政府が行政を担当するというように、地方政府は中央政府に責任を負いつつ、引き続き存続する。中央政府と地方政府との間に争いが生じた場合には、国民議会に責任を負って閣僚会議が最終決定する。地域によって法令が大きく異なることにそれぞれの中央省庁はどのように対処するのかという問いに対しては、パヴェリッチはこう述べた。各省庁は直接的に行政をおこなうのではなく、間接的に行政をおこなう。中央省庁の仕事はそれぞれの分野について議会に情報を提供することにある。ザグレブの行政府は引き続き従来どおりの権限をもつ。セルビアに存在する憲法上の諸権利（＝市民的な自由の保障）がクロアチアにも導入されれば、ザグレブの行政府に変化が加えられるだろう。それ以外の法令は引き続き有効である。地方政府を廃止して中央集権制を導入するというような提案はなかったのかという問いに対して、パヴェリッチはこう答えた。そのような提案はあったし、これからも出てくるだろう。しかし、我が党（＝スタルチェヴィッチ権利党）はそのような考え方に反対していくし、他の多くの政党もそのような考えを望まないだろう²⁰。

パヴェリッチは、12月3日の国民評議会の決定に関与していた人物であった。しかし、インタビューの中の発言から判断すると、意外なことに、国民評議会が重大な方針転換をおこなったという認識は彼にはなかったようである。彼の考えは驚くほど楽観的な期待に満ちていた。もっとも、パヴェリッチの考え方はあながち非現実的とはいえなかった。新しく誕生した国家の実情に照らしていえば、それはきわめて実際的な考えであった。なぜなら、この国家は互いに

異なった歴史と文化をもつ諸地域から構成され、それぞれの地域は政治制度や法体系が大きく異なっていたからである。たとえば、クロアチアおよびスラヴォニアでは、オーストリア、ハンガリー、クロアチアの法令が複雑に入り交じって適用されており、こうした状況は他の諸地域でも大同小異であった。中央省庁の閣僚や官僚に地域によって言語や表記の仕方も異なる法令の熟知を求めるには無理があった。したがって、憲法制定議会が選出されるまでは現行の法体系や制度を変えないとすれば、各地域の地方行政が従来どおりに行政を担当していくことは必要不可欠であった。中央政府との仕事の調整のために補佐官のポストを設けようという提案もユーゴスラヴィアの複雑多様な地域事情に基づいていた。しかし、まもなく中央政府が打ち出した政策は、クロアチア人の楽観的な考えを打ち砕くことになった。

ところで、12月29日、セルビアの国民議会は本会議を開き、満場一致で国家統合を承認した。会議には首相のストヤン・プロティッチが出席し、12月1日のセレモニーにおける国民評議会の声明文と摂政アレクサンダルの答礼文を読み上げた。翌年1月3日の本会議では、近く召集される臨時国民議会はセルビア議会の同一の権利と義務を有することを確認し、セルビアの国民議会はとくに必要がない限りこれで閉会とされた。12月中旬、セルビア議会の開催が決まった頃、クロアチアにおいても、議会（サボル）を開いて国家統合の批准の決議をおこなうべきだという考えが浮上した。これを提起したのはクロアチア大衆農民党のステパン・ラディッチであり、スタルチェヴィッチ権利党を始め、クロアチア人の政治指導者の多数はこれを支持した。すでに述べたように、クロアチアは自治王国としての地位を有する国であり、国家機関である議会が承認の手続きをおこなって初めてセルビアとの国家統合の協定は発効するとクロアチア人の政治家は考えたのである。ところが、中央政府はクロアチア議会を開催しないように働きかけた。とくに強い反対の立場をとったのが内相のプリビーチェヴィッチである。クロアチア議会の召集は、国家統合に反対する政治グループに意見表明の機会を与えることになるし、何よりもクロアチアの国家的地位を承認する既成事実となる恐れがあった。これはプリビーチェヴィッチが進めようとしていた中央集権的な国造りの方針に相反する事柄であり、それ

ゆえに彼は断固としてクロアチア議会の開催に反対したのである。

4 中央集権化政策の開始

1918年12月22日、中央政府は最初の閣議を開き、いくつかの決定をおこなった。その一つは、統一国家の記章および国旗、ラテン文字とキリル文字の平等性、新国家の成立に応じて既存のすべての在外公館の名称を変更すること、ユリウス歴に代えてグレゴリー歴を採用することであったが、より重大な決定は臨時憲法の作成を目的とする作業委員会の設置であった。この委員会は、法相のマルコ・トリフコヴィッチ、憲法制定議会担当の閣僚であるアルベルト・クラマー、社会施策相のヴィトミール・コーラッチを委員とし、1903年制定のセルビア王国憲法を土台とし、セルビア以外の諸地域に適用できない条文を削除ないし修正して、統一国家の全土に適用できる臨時憲法を作成する作業が課せられた。

臨時憲法作成のきっかけは、ベオグラードに滞在していた国民評議会の代表団からの働きかけであった。セルビア憲法は、集会・結社の自由や表現の自由など市民的および政治的自由を保障した規定を含んでいた。これは、旧オーストリア＝ハンガリー諸地域の南スラヴ人政治指導者が長年渴望していたものであった。なぜなら、旧オーストリア＝ハンガリーの支配層はしばしば反動的な法令を発動して政治的自由を侵害し、反体制的な動きを弾圧してきたからである。そこで、統一国家の成立にあたり、セルビア憲法に含まれる市民の自由と権利を保障した部分を新国家の全国民に適用することにしようかと国民評議会はセルビア政府側にもちかけたのである²¹。ここで国民評議会が求めたのは、セルビア憲法の一部の規定を抽出して、これを別個の法令としてセルビア以外の諸地域の住民に拡大適用することであった。しかし、この提案は、中央政府の中で検討されたとき、セルビア憲法全体を統一国家の臨時憲法とする方針に発展していった²²。

セルビア憲法には、市民的自由や政治的自由を保障した規定だけでなく、内閣制度、議会制度、地方自治、司法制度など国家機構の設立原則を示した規定

が含まれる。したがって、セルビア憲法を暫定的にせよ統一国家の全土に適用するということは、セルビアの国制に関する基本法を、セルビア以外の諸地域に適用することを意味していた。これはセルビアの国家組織をモデルにした中央集権的な国造りにほかならなかった。しかも、実際に公表された臨時憲法案には、その公布の日からこの憲法に反する法令はすべて効力を失うことが明記されていた²³。このような試みは、国民評議会側の了解事項を大きく逸脱するものであった。なぜなら、「ナプタク」に示されたように、憲法制定議会が国家制度の最終決定をおこなうまでの経過期間には、既存の法律・法令、行政・司法制度、地方政府機関はすべて有効とするというのが国民評議会側の基本方針であり、この方針は、12月1日の国家統合のセレモニーにおいて、国民評議会代表の要望を摂政アレクサンダルが受諾したことによって、セルビア側も受け入れたというのが彼らの理解であったからである。

委員会が作成した臨時憲法案は1919年1月30日に閣議で了承され、来るべき国民議会に上程されることになった。これを報じた政府系の通信社は、閣議ではスタルチェヴィッチ権利党の閣僚ジフコ・ペトリッチもこれに賛成したこと、臨時憲法の作成は国民評議会の要望に応えたものであることを付け加えた。これに対して、ザグレブのアンテ・パヴェリッチは即座に反論した。国民評議会の提案はあくまでセルビア憲法に含まれる市民の自由と権利を保障した部分のみを取り出し、これをセルビア以外の地域の住民に適用することであり、セルビア憲法全体の適用ではない。この点で政府系通信社の報道は事実と異なる。クロアチアの日刊紙『オブゾル』はパヴェリッチの発言をこう伝えた。このほかにもクロアチアのブルジョア政党が批判の声を上げた。たとえば、進歩民主党のイワン・ロルコヴィッチは、憲法制定議会が召集されるまでは既存の法律は変更しないことが国民評議会とセルビア政府との間で合意されているのに、政府はどのようにしてセルビア憲法を修正することができるのかと問い、このような行為はクーデターに等しいと断じた²⁴。

このようにセルビア憲法を臨時憲法とする案は、国民評議会、とりわけクロアチアの政治指導者の強い反発を引き起こした。しかしながら、政府が作成した臨時憲法案は官報に公表されたが、この官報は直後に条文番号の誤植を理由

に回収された。しかも、奇妙なことに、回収時に予告された訂正版はその後に
出されることはなかった²⁵。

こうして臨時憲法の制定計画は頓挫したが、ベオグラードの政府はもっと実
質的な形で国政の中央集権化を進めていた。中央政府と各省庁は新国家の全地
域を適用対象とする政令を個別に公布して、一元的な行政を始めた。その際、
政府は新しく法律を作るのではなく、旧セルビア王国で実施されていた法令を
参照し、その一部あるいは全部をセルビア以外の地域にも適用を拡大する手続
きをとった。たとえば、その皮切りは、1919年1月13日に厚生省が公布した公
衆衛生法であった。こうして、多くのセルビアの法律が全国規模で適用される
ことになった。

そして、地方政府の権限と組織を見直し、地方自治の破壊を徹底的に進めた
のが、内相のスヴェトザール・プリビーチェヴィッチである。12月22日の閣議
のあと、彼が長官を務める内務省は、旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の
地方政府に対して文書で通達を出した。それは第一に、地方政府の長官および
閣僚、その下にある地方行政区の首長に対して辞表の提出を求めた。辞表の提
出先は国王ペータル1世であった。第二に、外交、防衛、海事行政、国家財政、
鉄道、郵便、電信・電話、食糧管理、商業、工業、社会政策といった事項は、
中央政府の省庁が所管する行政事項であり、これと重なる事項を担当する省庁
は地方政府におかないことを述べた。この指示にしたがって、各地の地方政府
の長官および閣僚は次々と辞意を明らかにした。リュブリャーナのスロヴェニ
ア政府は12月23日に総辞職を表明し、ザグレブのクロアチアおよびスラヴォ
ニア地方政府の総督（バン）を務めるミハロヴィッチも12月28日に辞職を伝
えた。

地方政府の内閣に対する辞職勧告は当初、国家体制の変化に伴う正当な手続
きだと受け止められ、特段の反発もなかった。各地の地方政府の長官および閣
僚の多くは、もともと旧体制の下でオーストリア皇帝によって任命された人物
であった。彼らは、オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人諸地域が「スロヴ
ェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」として独立を宣言したあとも、
その臨時政府である国民評議会に忠誠を誓うことにより、旧来の地位にとどま

っていた。したがって、新しい統一国家が誕生し、国民評議会が解散した以上、彼らに辞職を求めるのは当然の手續きだと考えられたのである。問題はそのあとの処置であった。国王の地位を代行する摂政アレクサンダルは、プリビーチェヴィッチ内相の推薦にもとづいて、各地の地方政府の長官および閣僚を任命し直した。この結果、主としてプリビーチェヴィッチの判断により、ある地域の政府の長官は再任され、別の地域の長官は更迭された。クロアチア総督のミハロヴィッチは解任され、イワン・パレチェクが就任、スロヴェニア総督のヨシプ・ポガチニクも解任され、ヤンコ・ブレイチが任命された。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、アタナシエ・ショーラ議長は再任、ダルマチア地方政府の首長にはイワン・クルステリが再任された。選ばれた人物は中央政府の方針に協力的とみられる政治家ばかりであった。

旧体制の下では地方政府の長官は、その地域の議会にも責任を負い、その選任については地方議会が一定の影響力をもっていた。たとえば、クロアチアおよびスラヴォニアでは、政府の長官である総督(バン)は、クロアチア議会(サボル)とハンガリー政府首相の推薦にもとづいてオーストリア皇帝が任命することになっていた。したがって、新しい総督および政府閣僚の選任はクロアチア議会の指名によるか、少なくとも議員を出している諸政党の意見を集約した上で任命されることをクロアチアの政治指導者は期待していた。その際、最有力の候補者とみなされていたのは国民評議会副議長のアンテ・パヴェリッチであった。コロシェツやプリビーチェヴィッチら国民評議会を代表する同格の指導者は中央政府の閣僚に選ばれていたからである。ところが、新しい総督および政府閣僚は、クロアチアの諸政党の意向を聴くことなく、ベオグラードから一方的に選任された。しかも選ばれた人物はパヴェリッチではなく、「クロアチア人・セルビア人連合」所属のクロアチア議会議員、イワン・パレチェクであった。彼はいわずとしたプリビーチェヴィッチの腹心であった。このことは、いうまでもなくパヴェリッチおよび彼が指導するスタルチェヴィッチ権利党のメンバーを憤慨させた。

パレチェクの就任は1919年1月20日に発令された。1月23日、彼はベオグラードに赴き、任命式に臨んだ。摂政アレクサンダルはパリ和平会議に出席の

ため不在であったので、代わりに首相のプロティッチと内相プリビッチェヴィッチに対して新しいクロアチア総督は誓いの言葉を述べた。このことはクロアチアの地位の変化を象徴するものであった。このあとパレチェクは、政府系通信社のインタビューに応じて次のような趣旨の発言をおこなった。ザグレブのクロアチア政府はもはやこれまでのような自治権の担い手ではない。我々は、中央政府の指示に沿い、また中央政府の監督を受けて、あらゆる行政業務を遂行していくことになるだろう²⁶。パレチェクはまた、総督は議会に責任を負うことはないので、今後はクロアチア議会が召集されることはないことを断言した。

これまで地方政府が担当していた行政の多くは中央政府の省庁の専権事項となったので、プリビッチェヴィッチは地方政府に大幅な組織の縮小を命じた。このためクロアチアおよびスラヴォニア地方政府では、かつて 11 あった省庁は、彼の指示により、いったんは教育、法務、内務の 3 部門に整理統合され、のちに社会政策の部門が付け加えられた。クロアチアの関係者が期待していた公衆衛生の担当部局や経済および商工行政を担当する部門の設置は見送られた。スロヴェニア政府では、かつての 12 の部門は、教育、法務、農業経済、内務の 4 部門に縮小された。同様にボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府も 11 の部門が教育、法務、農業経済、内務の 4 部門に縮小された。ノヴィ・サドのヴォイヴォディナ行政府はその全部門が廃止になった。その一方で中央政府は各地の地方政府に官僚を派遣し、政府の指示を徹底させようとした。地方政府の地方議会への責任も廃止され、地方政府はベオグラードの中央政府に直接責任を負うこととなった。これによって、クロアチア議会など地方議会の召集は不要とされた。1919 年 2 月、プリビッチェヴィッチが明らかにした最終目標は、厳格な中央集権的な国家の樹立であった。彼の見方によれば、地方政府は、統治機構の問題が最終決定されていないので、もっぱら技術的な理由から、暫定的に中央政府の出先機関としてのみ存続しているにすぎないのであった²⁷。

もっとも、プリビッチェヴィッチはあらゆるレベルの地方自治を否定していたわけではなかった。彼は、地方政府の下級の行政単位には一定の自治権を与えようと考えていた。それゆえ、12 月 22 日の内務相通達も地方政府に対して、すべての州（オーブチナ）に選挙によって選出される議会を再建することを指

示していた。プリビーチェヴィッチの推薦で任命されたクロアチアの新総督パレチェクも、その就任会見で、統一国家の内部組織は中央集権的な行政の原則で編成されることを断言しつつも、そのもとで「州（オーブチナ）、県（コータル）、郡（ジュパン）の分権と自治が徹底的な民主主義を基礎として形成される」という見通しを述べていた²⁸。プリビーチェヴィッチが自治権を否定し、組織や権限を必要最小限に縮小しようとしたのは、スロヴェニア、クロアチアおよびスラヴォニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナといった大きな地域単位の自治制度であった。要するに彼が徹底的に否定しようとしたのは、連邦制的な国家編成であった。しかし、それは、そのような要素を強く残す旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の伝統的な国制を破壊することを意味していた。

国民が選出した憲法制定議会が国家組織を最終決定するまでは、各地域の法制度や統治機構は現状のまま存続させる。これが国民評議会に参加した政治指導者の了解事項であった。したがって、クロアチアでは、プリビーチェヴィッチが指導する「クロアチア人・セルビア人連合」を除く諸政党は、彼が導入した措置を重大な約束違反とみなし、非難と抗議の姿勢を強めた。進歩民主党のイワン・ロルコヴィッチは、プリビーチェヴィッチを「中央集権主義の狂信者」と呼び、彼の政策は旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の行政と経済に破壊と混乱をもたらし、国民の不満と抵抗を日増しに高めていると批判した²⁹。スタルチェヴィッチ権利党は、クロアチア総督のパレチェクがおこなった地方政府への入閣要請を拒否した。新政府の政策には責任をもてないというのがその理由だった。この結果、クロアチアの地方政府はプリビーチェヴィッチ派の政治家で固められることになった。日刊紙『オブゾル』は中央集権化の不当性を訴えた。それによれば、もし旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域がセルビアによって征服された領土であるならば、セルビアの法律を適用し、ベオグラード政府が集権的に管理するのは当然であるだろう。しかし、我々はセルビアに征服されたわけではない。だから中央集権化は論理的に正当化されない。我々は、憲法制定議会まで既存の制度に手をつけないという条件でセルビアと国家統合を決議した。クロアチアにはハプスブルク帝国よりも古い歴史があり、独自の国法上の地位がある。クロアチアはセルビアが征服したマケドニアと同じでは

ない³⁰。

抗議の高まりに対するプリビーチェヴィッチ自身の回答は、そもそも批判の根拠とされる「ナプタク」は政府の政策を拘束するような約束事ではないということだった。1919年1月末、プリビーチェヴィッチは新聞のインタビューに応じて以下のように述べた。批判者はあたかもクロアチアとセルビアとが国家間の協定か条約を結んだかのように錯覚して、国民評議会とセルビアとが結んだ協定を政府が守っていないとか、ナプタクに違反しているとか責任を問う声をあげているが、なぜそのような指摘がなされるのか自分には不思議でならない。あのナプタクは国家間で結ばれた条約などではけっしてない。いわんやバイブルでもないはずだ。国家組織が動き出したいま、ナプタクは実際には実行不可能であることが判明した。クロアチア総督は政府閣僚の指示に沿って統治をおこない、王国政府の監督のもとにおかれるようになった現在、その任命にはクロアチア議会の推薦が必要だとか、総督はクロアチア議会に責任を負うはずだという意見は理解できない。新国家の成立によってセルビア議会は機能を停止したのに、どうしてクロアチア議会だけが機能できるのだろうか。これはまったく筋の通らない話である。プリビーチェヴィッチはこのように述べて、議論の余地のある問題は来るべき国民議会の場で審議をして新しい協定を作成すればよいと提案した³¹。

5 プリビーチェヴィッチの新党結成

国家統合に際しての国民評議会とセルビア王国側との合意によれば、過渡期の国家は、暫定的な議会組織として、臨時国民議会を形成することになっていた。

臨時国民議会の形成にあたり、政府は地域ごとの議員数の配分を次のように決めた。1913年以前の旧セルビア 84、1913年以降にセルビアに併合されたマケドニア、コソボおよびサンジャク 24、モンテネグロ 12、旧「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」¹⁸⁸(うちクロアチアおよびスラヴォニア 62、スロヴェニア 32、イストラ 4、ダルマチア 12、バチカ、バナートおよびバラ-

ニャ 24、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ 42) 合計 308 であった。旧セルビア王国側と旧オーストリア＝ハンガリー領側の配分比率は 39 対 61 となっており、これは 1921 年の人口推計比 (36 対 64) に比べると、セルビア側に有利な配分となっていた。

各地域の議員の選出は各地域の政党が話し合っで決めた。主な地域の政党別の配分は次のとおりであった。セルビアでは、84 の議席はセルビア議会の議席数に応じて各政党に配分された。その結果は、急進党 39、独立急進党 20、国民党 11、進歩党 6、その他 8 であった。マケドニア、コソボおよびサンジャクは新しくセルビアに併合された地域であるので、その議席 24 は、3 月 30 日に選挙をおこなって選出することになった。旧「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の側では、国民評議会の構成メンバーはすべて臨時国民議会の議員になり、その他のメンバーは各地域の政党間の協議で決定することとした。クロアチアおよびスラヴォニアでは、62 の議席は、「クロアチア人・セルビア人連合」30、スタルチェヴィッチ権利党 15、社会民主党 2、国民党 2、クロアチア大衆農民党 2、セルビア急進党 2、その他 7 となった。ただし、クロアチア大衆農民党のラディッチは同党の配分数を不服とし、同党の代表は臨時国民議会に参加しないことを表明した。スロヴェニアでは、32 議席がスロヴェニア人民党 16、ユーゴスラヴィア民主党 11、社会党 5 に配分された。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、プリビーチェヴィッチが立ちあげた新党、国家創造民主党が 30 議席を獲得し、クロアチア国民連合 7、社会民主党 2、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織 (JMO) 2、その他 1 であった。

臨時国民議会の議員となった政治家の大半は、戦前の制限選挙の下で選ばれた議員であった。彼らは主としてブルジョア政党の代表であり、人口の大部分を占める農民階層の意志を反映している代表とはいえなかった。さらに臨時国民議会の代表には、ドイツ人、マジャール人、ルーマニア人といった少数民族の代表が含まれていなかった。これらの意味で、臨時国民議会は統一国家の民意を代表する組織とはいえなかった。しかし、ともかくもこのような議会が成立することで、統一国家は議会政治の形式を整え、政党政治のダイナミックスが動き始めるのである。

臨時国民議会の召集を目前に控えて、政党再編の動きが起こった。中心人物はスヴェトザール・プリビーチェヴィッチであった。彼は政権を支える強力な与党の結成を目論んだのである。もっとも、統一国家の発足時、彼はセルビア急進党の政治指導者と緊密な関係にあった。彼らは、強力な中央集権権力を有する単一国家を樹立するという共通の目的で結ばれていた。それゆえ、プリビーチェヴィッチのグループは早晩、急進党に合流するのではないかというのが周囲の観測であった。しかし、そうはならなかった。急進党はセルビア民族主義を基底に据える政党であり、諸民族の一体化を理念とするプリビーチェヴィッチとは基本的に考え方が異なる側面があった。プリビーチェヴィッチの理想は、統一国家の人民が歴史的・民族的な相違に対する執着心を捨てて「ユーゴスラヴィア人」として一致結束することであり、単一国家の樹立と中央集権主義はそのような国民を形成するために必要とされた。これに対して、急進党のメンバーにとっては、単一国家と中央集権主義は、セルビア民族主義に立脚した国家構想を実現するための手段であった。しかも、このような考えから、急進党の指導部はセルビア人居住地域以外に党の支持基盤を広げようとはしなかった。しかし、プリビーチェヴィッチの理想を実現するためには、統一国家の全地域に支持基盤をもつ国民政党が必要だった。したがって、プリビーチェヴィッチは急進党に合流せず、新党の結成を選択した³²。そのような政党は、近い将来召集され、国家制度を最終決定することになる憲法制定議会において議論の主導権を握るためにも必要であった。

プリビーチェヴィッチは、党首を務めるクロアチアの政党「クロアチア人・セルビア人連合」を母体として新党結成の準備を進めた。1919年1月8日、プリビーチェヴィッチの支持者は集会を開き、新しい状況の必要性に応える新しい政治組織に合流するように「クロアチア人・セルビア人連合」の議員に求める呼びかけを採択した。この新党は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の全居住地域を基盤に、広範な国民主義と民主主義の原則にもとづいて組織され、民族主義、地域主義、宗教主義などあらゆる分離主義的な志向を排除するとされた。プリビーチェヴィッチ自身は、1月下旬に政府系通信社のインタビューに答えて初めて新党の構想を明かし、セルビア人、クロアチア人、ス

ロヴェニア人を包摂するユーゴスラヴィア民主党の創設は、国民と国家の喫緊の必要に応えるものであると述べた。彼によれば、この新党が求める国家制度は、統一国家になお残存するすべての地方政府、すべての地方自治、そしてすべての歴史的な地域区分を最終的に清算するものであった。さらに彼は、類似の組織であるユーゴスラヴィア民主連盟についてどう思うかという質問に対して、中央政府の仕事は一部の共通事項のみとするような彼らの国家構想を断固として拒否すると述べた³³。

1919年2月15日と16日、プリビーチェヴィッチは、サラエヴォで新党の創立集会を開いた。新党の名称は、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の国家創造民主党」であった（以下では単に「民主党」と記す）。プリビーチェヴィッチが新党創立集会の場所としてサラエヴォを選んだことには特別の理由があった。それは、過激な運動に走り始めていたボスニアのセルビア人民族主義グループを牽制するという意味があった³⁴。実際それはひとまずは功を奏したようで、彼らの指導者ミラン・スルシュキッチは、プリビーチェヴィッチの威光を考えて、この集会に参加することを決めた³⁵。このほかボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人の政治的グループはすべてこの集会に参加した。しかし、集会の中核となったのは、やはり「クロアチア人・セルビア人連合」におけるプリビーチェヴィッチ支持派のメンバーであった。さらにこれ以外にも、プリビーチェヴィッチの呼びかけに応じて、クロアチア、スロヴェニア、ヴォイヴォディナ、ダルマチアの各地から、ユーゴスラヴィア主義の志向をもち、新党設立の趣旨に賛同するグループが集会に駆けつけた³⁶。

新党結成集会の冒頭、プリビーチェヴィッチは基調演説に立ち、その中で自らの国家構想を明快に語った。第一に、新しい国家は君主制をとり、カラジョルジェヴィッチ王朝から国王を戴く。第二に、この国家は、一つの主権、一つの政府、一つの立法府のもとに中央集権的に組織され、その上で必要に応じて適当な行政的分権化がおこなわれる。以上は議論の余地のない問題である³⁷。そもそも「中央集権主義とは」とプリビーチェヴィッチは力を込めて述べた。それは、「偉大な原則、偉大な理念である。いかなる闘いを強いられようとも我々は全力を挙げてこの原則と理念の実施に取り組まなければならない。こうして

初めて我々は国民全体の利益に奉仕する。我々は単一の国家、単一の統一国家を求める。しかし、それは決してセルビアが覇権をもつ国家などではない。同様にそれは、クロアチア人およびスロヴェニア人の特殊な地域的利害が守られるような国家でもない。我々はいかなる意味での覇権主義も分離主義も許容しないからだ」³⁸。

ユーゴスラヴィアの歴史の中で、プリビーチェヴィッチは、新しく形成された国家の全地域を一つの全体としてとらえ、国家の全領域に影響力のある政党を形成しようとした最初の政治家であった。統一国家の中にはいくつもの政党、政治グループがあったが、いずれも地域的に限定された政治集団であった。彼は統一国家にはこれにふさわしい全国政党が必要だと考えた。それゆえ、彼は既存政党の寄せ木細工的な連合体ではなく、統率がとれた新しい政党を創ろうとした。したがって、彼は、新党創立集会に参加した政党には、その組織を解散して、完全に新党に合体することを求めた。集会に参加した政党は、一部を除いてほとんどがこの求めに応じて組織を解散することに同意した³⁹。集会の最後に、参加者は新党の役員を選び、プリビーチェヴィッチを議長とする臨時執行部が選出された。

こうしてプリビーチェヴィッチの新党、民主党は発足した。しかし、この党は1919年2月の時点では、旧オーストリア＝ハンガリー領の政治代表の組織化に成功したにすぎなかった。プリビーチェヴィッチの構想は、全ユーゴスラヴィア的な国民政党を結成することであった。この目的は、セルビアおよびモンテネグロの政治勢力が新党の隊列に加わることによって初めて達成される。それゆえ、プリビーチェヴィッチら執行部はこのあとすぐにセルビアの諸政党の指導者に連絡をとり、その組織を解散してこの新党に合流することを働きかけた。彼らが最初に接触したのはセルビアの最大勢力である急進党であった。しかしながら、民主党執行部の構想に対して、プロティッチら急進党指導部は自党を解党する意志はないことを告げ、逆に民主党が急進党に合流することを勧めた。これはもちろん、民主党にとっては応じられない提案であった。これに対して、独立民主党、進歩党、自由党の各党は、民主党の呼びかけに積極的な関心を示した。セルビアの野党勢力は、急進党との対抗上、民主党との合同を

政権戦略の有力な選択肢ととらえたのであった。彼らは自党の組織を解散し、新党に合流する用意があることを民主党執行部に伝えた。民主党とセルビアの野党勢力は、3月に臨時国民議会の会議が始まってからも交渉を積み重ねた。1919年4月中旬、両勢力は基本政策で合意をみて、統一会派「民主連合」を成立させた。それはまもなく組織的に民主党に一本化された。

新しい民主党のトップには、プリビーチェヴィッチではなく、旧独立急進党の党首リュバ・ダヴィドヴィッチが就任した。ダヴィドヴィッチはこの年56歳、進歩的な政治思想の持ち主であり、実直で温厚な人柄から信望の厚い人物であった。民主党の成立に際し、その創設者にして最大のイデオログであるプリビーチェヴィッチは党首に就任しなかった。それには合理的な計算と判断があった。プリビーチェヴィッチはクロアチア出身のセルビア人であった。統一国家は成立したが、それぞれの地域の住民はなお旧来の地域に強い帰属意識をもっていた。このような状況で、プリビーチェヴィッチが党首として前面に立てば、民主党は旧オーストリア＝ハンガリー領出身者が主導する政党だという印象をセルビアの有権者に与え、無用な心理的抵抗を引き起こす恐れがあった。他方、セルビアには強固な地盤をもつ急進党があった。プリビーチェヴィッチは、民主党の路線を成功に導くためには、急進党の地盤を切り崩して支持基盤を広げていく必要があるとみていた。したがって、旧セルビア王国の諸地域で民主党が急進党と対抗して勢力を広げていくためには、やはり旧セルビア王国出身の政治家をトップに立てる必要があった。この点でセルビア人の間で人気の高いダヴィドヴィッチは、プリビーチェヴィッチよりも党首にふさわしい人物であった。彼はまた、長年にわたり野党勢力の指導者として急進党の政策に批判的立場をとり、第一次世界大戦中にはユーゴスラヴィア委員会と協力関係を築いたという経歴をもっていた。この意味で、ダヴィドヴィッチは、旧オーストリア＝ハンガリー領におけるセルビア人以外の諸民族にとっても抵抗の少ない人物であった。

このような理由から、プリビーチェヴィッチは、党首の座をダヴィドヴィッチに譲った。しかし、プリビーチェヴィッチは、けっしてフォロワーの地位に満足していたわけではなかった。むしろ、彼は党運営の主導権を握り、実質的

な指導者になろうとした。彼は、ダヴィドヴィッチをあたかも傀儡の指導者のように扱おうとした。ところが、ダヴィドヴィッチは、プリビーチェヴィッチに操られることを望まなかった。それゆえ、民主党はその発足時から実質的には二人のリーダーが存在した。プリビーチェヴィッチは、主として旧オーストリア＝ハンガリー領出身のメンバーを束ね、ダヴィドヴィッチは旧セルビア王国出身のメンバーを束ねた。プリビーチェヴィッチは、既成政党の連合ではない、まったく新しい、統率のとれた政党を創ろうとしたが、出来上がった新党は依然として異質な政党の寄り合い所帯の様相を払拭できないでいた⁴⁰。

民主党の結成に触発され、これと同時期に結成された有力な政党には、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織（JMO）があった。同党は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナに居住するムスリム人の政治的な利益代表であった。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人（イスラム教徒の南スラヴ人）が入り交じって居住する地域であったが、国家統合の直後から、地方政府ではセルビア人グループの支配が強まった。農村では、農地改革をめぐる、セルビア人農民とムスリム人地主との衝突が激しくなった。ムスリム人の指導者は、ムスリム人の利益を護るため、政党組織の形成に乗り出し、いくつかの地域政党が生まれた。1919年2月、サラエヴォで新党の創立集会を計画していたプリビーチェヴィッチは、ムスリム人指導者に対して、民主党に合流するように呼びかけた。これに応じていくつかのムスリム人グループは民主党の組織に加わったが、彼らはムスリム人の中では少数派であった。ムスリム人指導者の大多数は、プリビーチェヴィッチの新党に加わるよりも、大同団結によって自分たちの交渉力を高める道を選択した。こうして、1919年2月14日から17日、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ各地のムスリム人代表をサラエヴォに集めて、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の設立総会が開かれた。それは、プリビーチェヴィッチの新党創立集会と重なる時期であった⁴¹。

6 政党間対立の表面化と連立内閣の崩壊

国家統合の宣言から3ヶ月後の1919年3月1日、臨時国民議会が初めて開か

れた⁴²。3月4日に始まった第1回定例会議では、摂政アレクサンダルが式辞を述べた。このあと各政党の代表が答辞の形で基調演説をおこなうことで、実質的な討論が開始される手順になっていた。ところが、アレクサンダルが読み上げた式辞の文章をめぐって、3月18日、農業相のジフコ・ペトリッチが辞表を提出するという事態が起こった。彼は、クロアチアのスタルチェヴィッチ権利党に所属する政治家であった。

問題になったのは、政府が起草した式辞の文中に、セルビア憲法の臨時憲法化の提案を意味する章句が含まれていたことであった。これは憲法制定議会まで既存の法制度は変えないという国家統合の際の合意に反するという理由から、ペトリッチはこの章句の変更を求めた。しかし、その主張は受け入れられなかったため、ペトリッチは抗議のため閣僚の職を辞任したのであった。彼は、自分が辞職したからには、彼が所属する国民クラブ（スタルチェヴィッチ権利党の議会内会派）はこの問題に関して自由に議論をおこなうと警告した。

次いで3月28日、社会政策相のヴィトミール・コーラッチも辞表を提出した。彼は社会民主党に所属するクロアチア人であった。辞職の理由は、一つには政府が進めている農地改革の方法に対して党内から反対が出ているということであり、もう一つはペトリッチと同様に国家統合の際の合意に反する提案が政府起草の式辞から削除されなかったことへの抗議であった。ペトリッチとコーラッチの二人が辞職したことによって、プロティッチ内閣には、元「クロアチア人・セルビア人連合」のプリビーチェヴィッチとエド・ルキッチを除けば、クロアチア出身の閣僚がいなくなった。なおこの二人の辞任に先立って、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身の国土・鉱山・森林相メフメド・スパホが辞職しており⁴³、プロティッチ内閣は3人の閣僚を欠く事態に陥った。

プロティッチ内閣は、旧オーストリア＝ハンガリー領の諸政党と旧セルビア王国の諸政党との連立政権であった。プロティッチは引き続き連立内閣を維持するつもりであったので、内閣を構成する他の諸政党の代表も交えて、国民クラブ代表と政権協議をおこなった。国民クラブ代表として出席したアンテ・パヴェリッチらは、政権参加の条件として、次のような事項の実現を求めた。1 国民評議会とセルビア政府との協定の尊重、2 この協定に確認された統治組織を

各地域で、とくにクロアチアにおいて再建すること、3 中央集権制を先取りするような規定を臨時憲法には盛り込まないこと、4 クロアチア議会の召集、5 集会および言論の自由の保障、ならびに反対勢力の追放や逮捕の停止、6 ザグレブおよびサラエヴォの地方政府に国民クラブ代表の参加を認めること。以上の条件が満たされれば、国民クラブは二人の閣僚を引き受ける用意があるとパヴェリッチは伝えた。

プロティッチは、政権を安定させるためには、クロアチア人の協力が必要であり、彼らの要求をある程度は受け入れてよいと考えていた。そのため、国民クラブとの交渉に際しては、プロティッチは、自治権の回復を求めるパヴェリッチらの主張に理解を示し、地方議会を立法機関として開催し、全国的利害に関係のない事項については法案審議する権利を認める用意があることを伝えた。しかしながら、このような譲歩案については、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチが断固反対した。そのような方針の採用は、彼が進めてきた内政政策の根本的な転換を意味したからである。パヴェリッチの証言によれば、このときプリビーチェヴィッチは「自分が生きている限り、クロアチア議会は開かせない」と机をたたいて言い放ったという。プリビーチェヴィッチは、辞表の提出も辞さない態度でプロティッチに翻意を迫った。実力者の彼が辞職すれば民主党閣僚がこれに同調し、内閣そのものが崩壊するのは必至であった。それゆえ、プロティッチは連立政権の維持のためには、少数勢力の国民クラブを切り捨て、プリビーチェヴィッチの主張を受け入れざるをえなかった。プロティッチは前言を撤回して、国民クラブの要求をすべて拒否した。その結果、国民クラブは野党に転じた。

閣外に去ったあと、国民クラブは、野党的な勢力の連携、すなわち、非「急進党・民主党」ブロックの形成に展望を見出そうと考えた。国民クラブ、旧セルビア王国の野党勢力、ユーゴスラヴィア・クラブ、社会党が議会で協力すれば、急進党と民主党によって支えられる政権に一定の影響力を行使できるのではないかと考えたのである。国家統合の直後、プリビーチェヴィッチが急進党指導部と親密な関係にあったころ、スタルチェヴィッチ権利党やスロヴェニア人民党など国民評議会内の非プリビーチェヴィッチ派の政治勢力と、ダヴィド

ヴィッチを中心とするセルビアの野党勢力は互いに接近し、一定の協力関係を結んでいた。このことを背景に、国民クラブは、議会内でのセルビアの野党勢力との連携を期待した。しかし、この期待は幻想に終わった。すでに述べたように、セルビアの野党勢力は、プリビーチェヴィッチの民主党との統一会派、「民主連合」の形成を選択し、まもなく民主党に組織を一本化したからである。

臨時国民議会では、中央集権主義を支持する政党が絶対的な多数勢力を構成し、これに反対する勢力は少数派であった⁴⁴。しかし、政府にとってやっかいな抵抗勢力は議会外にあった。共和制主義者や共産主義者が民衆レベルの不満と反感を吸収して勢力を拡大していたからである。とりわけ急速に支持者を拡大していたのは、ステェパン・ラディッチが指導するクロアチア大衆農民党であった。「セルビアと一緒になろう。だがセルビアに支配されるのはごめんだ。セルビア人は、統治者ではなく、我々の同胞であってほしい」。ラディッチはわかりやすい言葉で民衆に語りかけ、その心をつかんだ。彼は、政府と王制を痛烈に批判し、クロアチアの自治権回復を求めた。彼の党は、都市の知識人や商工業者を支持層とする既存の諸政党とは異なって、人口の大部分を占める農村居住者の間に支持を浸透させる戦術をとった。農村部の住民こそは、セルビアから派遣された軍隊や行政官の無慈悲な行動の直接の被害者でありながら、既存のブルジョア政党が軽視していた階層であった。他方、都市部では共産主義者の運動も無視できなかった。南スラヴ人統一国家の建国と同時期に隣国のハンガリーでは共産党が勢力を拡大していたので、その影響の波及を政府は恐れた。ハンガリー共産党は、1919年3月21日には権力を奪取してソヴィエト政権を樹立した。これはベオグラード政府にとっては大きな衝撃であった。

警戒を強めた政府は、検閲を強化する一方で、1919年2月25日、「セルビア王国の刑法第9章および第10章の規定を王国の全土に適用する勅令」を制定した。セルビア王国刑法の第9章は国王および王家に対する不敬罪を規定し、第10章は憲法が規定する秩序と国家制度を脅かす犯罪行為を規定していた。この法律は、共和制主義者や共産主義者など「反国家分子」を取り締まることをねらいとしていた。実際、最初の適用対象となったのは、クロアチア大衆農民党の党首ステェパン・ラディッチと同党の幹部二人であり、それは内相プリビー

チェヴィッチの直接の指示によるものであった⁴⁵。

さらに政府は、セルビア軍による治安維持を強化するため、スロヴェニアを除く旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域を、「準戦時地帯」と規定して、セルビア軍刑法の適用を認めた。これにもとづいて、4月28日、セルビア軍総司令部は、「犯罪行為の軍法会議に関する法律」の適用命令を出した。同法の「我が軍が占領する敵軍地域の住民は軍法会議にしたがう」という規定によって、セルビア軍は一般市民を敵軍住民とみなし、軍法会議という特別裁判所で裁判にかけることが可能になった⁴⁶。このような政策によって、クロアチアおよびスラヴォニアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの住民は、セルビア軍将校や兵士による抑圧や暴走にいつそう苦しめられることになった。

ところで、民主党の拡大によって与党政権は安定したかといえ、そうではなかった。新しい民主党の出現は内閣の政党別構成を一変させた。プロティッチ内閣は、民主党所属の閣僚が過半数を占める構成になった。これに対して、急進党の閣僚は首相のプロティッチを含めて3人にすぎなかった。この結果、プロティッチとプリビーチェヴィッチの閣内での力関係は変わり、クロアチアの反対勢力への対応にみられるように、プリビーチェヴィッチはプロティッチに勝る発言権をもつことさえあった。国家統合の直後には良好な協力関係にあった二人は、国民クラブへの対応をきっかけに背を向け合うようになった。一方、民主党は議会の外でも急進党と勢力圏争いを始めていた。争いの場は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとヴォイヴォディナであり、両地域のセルビア人をどちらの勢力の配下におくかが争点であった。プロティッチとプリビーチェヴィッチの対立は、規模を拡大した民主党が議会の内外で急進党との勢力争いを激化させるにつれて、いつそう深まった。

プロティッチを始め急進党の指導部は、プリビーチェヴィッチを旧オーストリア＝ハンガリー領、とりわけクロアチア統治の専門家とみなしていた。セルビア民族主義の急進党は、スロヴェニア人やクロアチア人の間に支持を拡大しようとする意図はなかったので、急進党指導部は、旧オーストリア＝ハンガリー領については、彼らの既得権を犯さない限り、プリビーチェヴィッチの行動と政策を容認することにしていた⁴⁷。この意味で、急進党指導部は、プリビーチ

エヴィッチを「同格」の政治家とはみていなかった。ところが、プリビーチェヴィッチは、このような不公平な取り扱いに甘んじるつもりはなかった。彼はあらゆる地域での政治的平等と同権を求めた。「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者の時代に培われたこの信条は新しい国家においても不変であった。プリビーチェヴィッチは統一国家のあらゆる地域の有権者の支持獲得をめざす新党の結成をボスニア・ヘルツェゴヴィナで進めたが、このことは急進党の勢力圏に対する挑戦状を意味した。急進党指導部も彼の意図を十分に承知していたが、まだセルビアの外での陣地争いと考えていた。しかし、彼の新党が旧セルビア王国での勢力拡大をめざして、セルビアの野党勢力との合同を果たしたとき、プロティッチと急進党指導部にとって、プリビーチェヴィッチは彼らの本丸であるセルビアの土俵の上で闘いを挑むライバルになっていたのである。

1919年5月、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、クロアチアおよびスラヴォニアなどの民族構成が複雑な地域では、治安の悪化がさらに顕著になっていた。各地で暴動が頻発し、器物の破損や略奪行為が横行した。ヘルツェゴビナ南東部では住民の一部は逃散し、ボスニア東部からサンジャクにかけての一带では、住民同士の争い、とくにムスリム人とセルビア人の衝突は内戦の様相を呈した。スラヴォニアやスリエムでは盗賊集団が取り仕切る地域があった⁴⁸。こうした事態に対して、閣内対立を抱える政府は有効な対策をとれないでいた。

首相のプロティッチは、プリビーチェヴィッチと民主党に対抗するため、国民クラブおよびユーゴスラヴィア・クラブとの連携をとろうとした。前者がクロアチア人の議会内会派であるのに対して、後者はスロヴェニア人民党を中心にした議会内会派であり、その指導者は副首相のアントン・コロシェッツであった。スロヴェニア人のコロシェッツはプリビーチェヴィッチの政策に不満を抱いていたので、プロティッチの協力要請に応じた。このとき、混乱と治安の悪化が続くボスニア・ヘルツェゴヴィナに対して、プリビーチェヴィッチは地方政府を廃止し、ベオグラード政府の直接統制の下におくことを提案していた。しかし、コロシェッツは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの問題は、同地の諸政党が協定を結び、連立政権を構成することで解決すべきだと述べた。彼は、プリビーチェヴィッチとはまったく逆に地方政府の自治権の回復を提案し、プリ

ビーチェヴィッチ案の閣議決定を阻止した⁴⁹。

プロティッチとプリビーチェヴィッチの党派抗争は、1919年7月にクライマックスを迎えた。劣勢のプロティッチは捨て身の策に出た。彼はコロシェツと共謀し、内閣の危機を演出して、プリビーチェヴィッチの責任を問題にしようとしたのである⁵⁰。しかし、これは失敗に終わった。7月28日、急進党の議員は、議会の審議への欠席を理由にプリビーチェヴィッチの内相辞任を要求したが、彼は断固としてこれを拒否した。

このあと、プロティッチは、クロアチアの首都ザグレブに向かった。ザグレブでは、これに先立つ7月17日、臨時国民議会で国民クラブを構成するスタルチェヴィッチ権利党と進歩民主党の両党がイニシアチブをとり、クロアチアおよびスラヴォニア、ダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの各地からクロアチア人の代表を集めて集会を開き、「クロアチア共同体」という名の新党を結成していた⁵¹。プロティッチは、クロアチア人政党との交渉に一縷の望みを託した。これに対して、プリビーチェヴィッチは摂政アレクサンダルの保養先に向かった。民主党の機関誌は、プリビーチェヴィッチがアレクサンダルに特別の謁見を許されたことを伝えた。勝敗は明らかであった。8月1日、ベオグラードに戻ったプロティッチは、摂政アレクサンダルに対して辞表を提出した。国家統合後の最初の内閣は、実質7ヶ月で崩壊した。辞任理由書の第一項にプロティッチは、内相プリビーチェヴィッチとの内政政策をめぐる見解の不一致を書き記した。

7 政治抗争の時代へ

旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人の代表組織である国民評議会のメンバーは、1919年12月、セルビアとの国家統合によって誕生した新国家に広範な地方自治の維持を期待した。ところが、実際に実現した統一国家の国制はこの期待とは大きく異なった。統一国家の政府はセルビア政府の組織を継承し、臨時国民議会はセルビア議会を拡大したものであった。旧オーストリア＝ハンガリー領各地域の自治権は廃止され、地方政府は中央政府に直属する下部組織

になった。スロヴェニア人やクロアチア人の政治家は、セルビア憲法の中にあるリベラルな規定を賞賛し、市民的な自由と平等の保障を統一国家に期待していた。この期待も見事に裏切られた。新生ユーゴスラヴィアの実態は、旧セルビア王国が拡大した単一国家であった。しかも、それは野蛮な官憲支配が横行する恐ろしく反動的な国家であった⁵²。旧オーストリア＝ハンガリー領の人びと、とりわけクロアチア人は、旧オーストリア＝ハンガリー時代の状況よりも惨めな境遇におかれたと感じた。1919年7月にクロアチア共同体の結成集会において満場一致で採択された決議は、政府とその政策に彼らがいかに失望していたかを示している。

「我々は以下の事柄を要求する。国家統合の時点で実施されていたように、地方政府と地方議会の自治を認めること。もし変更が許されるとすれば、それはすべての政党が無条件にやむを得ないと認めた場合に限る。それゆえ、法律の文言および国民の意思に逆らって導入されたあらゆる措置を我々は非難する。それは国民の不满を引き起こし、統一国家を根本から台無しにしているからだ。

したがって、我々は以下の事柄に抗議する。政府の内政政策によって、どうにも耐え難い状況が発生したこと。立法も人間性も無視した無慈悲な官憲支配が導入されたこと。何百人もの市民がその政治信条のゆえに身柄を拘束され、訴訟手続きもなされずに何ヶ月も投獄されていること。多くの者が警察による監視、移動の自由の制限、暴力的被害をこうむり、国外追放になった者さえいること。その一方で政府は司法権の独立の確保に留意せず、それどころか世論を操作して判決に影響を与えようとする運動を許容していること。

我々は以下の事柄を断固として要求する。政治的な誹謗・不敬の罪で逮捕されたすべて者を監獄から釈放すること、あるいは彼らに対して遅滞なく通常の訴訟手続きを開始すること。

我々は以下の事柄を断固として抗議する。政府が率先して密告者の組織を作り出していること。政府に批判的な出版物を発禁処分にし、あらゆる政党が公に集会を行うのを禁じていること。いわゆる『国家創造』政党（＝プリビッチェヴィッチの民主党）の組織化の際には行政機構は人員を動員しているのに、個人の生命と財産を市民に保障する制度には人員を割いていないこと。政府が

専制的な方法で命令を出し、法律を変更していること。汚職は蔓延し、それは政治指導者にも伝染していること。それなのに経済、交通、財政の混乱には何の手立てもとられていないこと。これと同じく、農地改革、通貨制度の改革、交通網の整備は失敗し、まったく無秩序な状態に陥っていること」⁵³。

なぜこのような事態になったのか。クロアチア人の政治家は、国家統合に際しての合意をセルビア側が遵守しなかったことを常にやり玉に挙げた。彼らにとって、新しい国家の形成にあたり、もっとも尊重されるべき事項は、「今後召集される憲法制定議会が最終決定するまでは既存の国制と法制は変更しない」ことであった。このことを、国民評議会の側は、セルビアとの国家統合を決定する際に基本的な前提条件とした。そして、このことは、国家統合の際にセルビア側も承認していたはずだというのがクロアチア人側の主張であった。

しかしながら、セルビア側からみれば、そのような承認を与えた覚えはなかった。たしかに、1918年12月1日の国家統合のセレモニーにおいて、セルビア王国の摂政アレクサンダルが読み上げた答辞の文章は、国民評議会側とセルビア政府との合意に沿って統一国家の政府は仕事を開始すると述べている。しかし、これだけでは国民評議会が提示した国家統合の条件をセルビア側が承認したかどうかは定かではない。それよりも大きな問題は、国民評議会はセルビア代表と国家統合の条件を取り決めていなかったことである。国民評議会は、セルビアとの国家統合を決定する際、ずいぶん時間をかけて統合後の国家像を議論した。彼らはこれを国家統合の基本方針（ナプタク）としてまとめ、採択した。その最大の目的は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人地域がセルビアに飲み込まれないようにすることであった。

ところが、ベオグラードに到着した国民評議会の代表団は、これにもとづいてセルビア代表と事前に交渉をすることなく、国家統合のセレモニーに臨んだ。彼らはナプタクのいくつかの事項を国民評議会側の式辞のテキストに書き込み、国民評議会側とセルビア政府との合意に沿って国造りをおこなうとする摂政アレクサンダルの答辞をもって、基本合意が得られたと思い込んだ。しかし、実際にはこの時点では国家統合と新国家の樹立が宣言されただけであり、この国家がどのような方針で組織されるのかは何も決まっていなかった。

摂政アレクサンダルのいう「国民評議会側とセルビア政府との合意」はまだできていなかった。それは、むしろこれからの交渉によって達成されるべきものであった。それにもかかわらず、アンテ・パヴェリッチを始め国民評議会の代表団の大半のメンバーは、これで仕事を終えたかのごとくベオグラードを去った。残った代表団のメンバーも政府閣僚の人選に参加しただけであり、政府や国家のかたちそのものを議論の対象にはしていない。結局、国民評議会の代表団はセルビア代表と、国家統合に関して何の協定文書も取り交わしていなかった。これでは、セルビアとの統合を無条件で承認したことに等しかった。きびしくいえば、彼らは不作為の罪を犯していた。実際、フリーハンドを得たセルビア側は、中央集権体制を瞬く間に築いていったのである。

もっとも、国家統合がこのように無条件で既成事実となったことについては、国民評議会側の実力者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの協力が大きかった。彼は、セルビア側関係者と密接な関係を築き、彼らの意向に応じて国家統合をまず先行させることに尽力した。国民評議会の代表団内の議論ではパヴェリッチらの抵抗を抑えて、地方政府の自治権の保障を意味する文言を、国民評議会側の式辞や摂政アレクサンダルの答辞に入れなかったことに同意させた。国民評議会の代表団には「獅子身中の虫」がいたといえる⁵⁴。しかし、この点を割り引いても、ザグレブに戻ったばかりのパヴェリッチの会見記事が示すように、この頃のクロアチア人政治指導者の多くはセルビア側の出方について甘い見通しをもっていたことは否定できない。旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家の多くは修羅場をくぐった経験がなく、現実政治の厳しさをまだよくわかっていなかったのかもしれない。

このようなクロアチア人政治家と比べると、セルビアの政治家は筋金入りのリアリストであった。彼らの父祖にあたる世代は、長年にわたりトルコと戦って、セルビアの独立を勝ち取ってきた。トルコの当局は反逆者を容赦なく殺戮した。トルコ人の支配者は、見せしめのためにセルビア人を串刺しにして街頭にさらすこともいとわなかった。このことを昔の世代の人びとはまだ記憶していた。彼ら自身の世代も、セルビアの前王朝、オブレノヴィッチ王朝時代の専制政治と抑圧政策を堪えてきた。パシッチを始め、急進党の指導者の多くは投

獄を経験していた。1903年、クーデターによって王朝が交代したセルビアには憲法にもとづき市民的権利や民主制度が導入された。しかし今度は、セルビアの政治家は与野党に分かれて仮借のない闘いを続けることになった。このような経験から、彼らは権力を獲得することがいかに重要であるかを肝に銘じていた。彼らは権力とは何かを体でわかっていた。

これに対して、旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家は概して権力を頭でわかろうとした。クロアチア人やスロヴェニア人が所属していたハプスブルク帝国は、ロシアやトルコとは違って、征服戦争ではなく、主として様々な国家や民族との契約によって領土を拡大してきた。たとえば、1102年のハンガリーとクロアチア王国との契約、1527年のオーストリアとクロアチアとの契約、1868年のハンガリーとクロアチアとの協定がそうである。ハプスブルク帝国の中では、その他のいかなるヨーロッパ列強の中よりも協定や契約が遵守されてきたことは強調されなければならない。そこから、規範的な正当性を重視する独特の政治文化が彼らの間に発達した。過去に結ばれた契約にもとづいてクロアチアの国権を主張する「権利主義」思想はその典型である。「国家統合の際の合意」にクロアチア人の政治家がこだわったのもこのような政治文化を背景にしていた。しかし、それはセルビアの政治家には弱者の論理にしか映らなかったかもしれない。

この当時の旧オーストリア＝ハンガリー領とセルビアの政治家のタイプの違いに関して、同時代のクロアチア人ジャーナリスト、ヨシプ・ホルヴァートは、興味深い対比をおこなっている。彼はこう述べる。「国民評議会側のメンバーにとって重要であったのは政治理論であるが、セルビアの政治家にとって重要なものは実際上の権力であった。旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家は大企業の管理職にたとえられる。彼らはその中（ハプスブルク帝国）で教育訓練を受けているが、国家行政の一部の部門を知るのみである。これに対して、セルビアの政治家は、小なりとはいえ自分たちが所有する会社の幹部であった」⁵⁵。

セルビアの政治家は独立国家の統治の経験があった。したがって、彼らは権力をいかに行使すべきかを知っていた。彼らにとって、中央集権制は統治の手段であり、それ自体が目的なのではなかった。だから、ストヤン・プロティツ

チがそうであったように、統治を安定させるためには、旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家と交渉して、ある程度は中央集権制を緩和する用意があった。これに対して、プリビーチェヴィッチは、「諸民族の一体化」の理想にもとづき中央集権化を原則として厳格に追求し、譲歩や妥協をおこなうことには断固として反対した。前述のホルヴァートの対比にしたがえば、プリビーチェヴィッチもまた政治理論を重視していた点で旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家であった。あえていえば、プリビーチェヴィッチは原理主義的なイデオログであったが、プロティッチを始めセルビアの政治家はプラグマチストであった。

ところで、以上で述べた旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家は、第一次世界大戦前の制限選挙の下で選ばれた議員であった。彼らは主としてブルジョア政党の代表であり、人口の大部分を占める農民階級の意志を反映している代表とはいえなかった。まもなく導入された普通選挙は、彼らの多くを淘汰し、新たな政党と政治指導者を台頭させることになる。たとえば、クロアチアではクロアチア大衆農民党のステパン・ラディッチであり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナではユーゴスラヴィア・ムスリム組織がそうであった。他方、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人政治家はユーゴスラヴィアの実態に失望していたが、その元凶はプリビーチェヴィッチであり、セルビアの政治家とはまだ交渉の余地があるとみていた。セルビアの政治家と旧オーストリア＝ハンガリー領の政治家、とくにクロアチア人の政治家はまだ決定的な対立の局面には達していなかった。新しい主役を交えて、中央集権制の追求と緩和を焦点とする大戦間期ユーゴスラヴィアの激動のドラマはこれから始まるのであり、本稿で明らかにしたプロセスはその序章にすぎない。しかし、それはその後の民族・地域間の対立の原点を形成したこともまたたしかなのである。

註

¹ ただし、議院内閣制には、議会と君主の双方に責任を負う二元主義的な形態と、もっぱら議会の信任だけに依存する一元主義的な形態とがある。議院内閣制はイギリスの近代議会制度の中でだいに成立し、二元主義的な形態から一元主義的な形態へと展開してきた。それは、君主に実質的権能が残っている段階では前者の形態をとっていた。しかし、普通選挙

の原則が成立し、権力の正当性根拠が国民意思に一元化されるようになると、君主は行政権を内閣に譲り渡し、その内閣は君主の信任によっては左右されず、議会の信任だけに依存する。日本国憲法の下での日本の内閣は一元主義的な議院内閣制の典型である。しかし、第一次世界大戦以前のセルビアおよびオーストリア＝ハンガリーでは、君主の実質的な行政権が強く残っており、内閣は君主と議会の両者に責任を負う二元主義的な形態をとっていた。新しく誕生した南スラヴ人国家も、このような伝統を引き継いで、君主権の非常に強い議院内閣制を採用していくことになる。

² セルビア側代表の与党および野党の政治指導者は事前に協議し、首相、外相、内相、財務相、交通相、法相、教育相など8つの主要な閣僚ポストをセルビア側が確保することで合意していた。それ以外の比較的重要でないポストのみを、旧オーストリア＝ハンガリー地域の出身者に分け与えようということであった。協議の過程でこの「談合」が判明し、国民評議会の代表は、統一国家建国の精神に反する行為として、猛烈に反発した。以上は、Neda Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, Globus, Zagreb, 1989, pp. 33-34、による。

³ *Ibid.*, p. 34.

⁴ *Ibid.*, p. 34.

⁵ 彼らがリスティッチを外相候補として推した理由は、外交官としての経歴に加え、彼が政党に属さない中立の人物であることであった (*ibid.*, p.34)

⁶ 第一次世界大戦の初期の1915年にイタリアがイギリス、フランス、ロシアの三国と結んだロンドン協定は、協商国の側に立って参戦する見返りとして戦後にアドリア海沿岸地域の一部をイタリアが併合することを認めていた。トルムビッチは、アドリア海に面するダルマチア地方の出身であり、彼が議長を務めるユーゴスラヴィア委員会の設立目的の1つは、この協定の履行を阻止し、南スラヴ人の領土を保全することにあった。

⁷ Bogdan Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, Školska Knjiga, Zagreb, 1977, pp. 253-255.

⁸ Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 35.

⁹ このときスモドラカの念頭にあったのは、統一国家の発足直後の12月5日にクロアチア首都のザグレブで起こった流血の事件であった。そこでは、国家統合に不満と反対の意思を示すために行進をおこなっていた旧オーストリア＝ハンガリー帝国軍のザグレブ駐留部隊が、ザグレブの中心街イエラチッチ広場で国民評議会所属の警護隊と衝突、銃撃戦となり、死傷者20数名を出した。

¹⁰ *Ibid.*, p. 36. 議論の中で、プリビーチェヴィッチ自身も、次のような理由を挙げて、自分を推薦したスモドラカの案を支持した。それは、新政府の内相はクロアチアのバン(総督)を管理下におく必要があり、クロアチアの政治制度と伝統をよく知らないセルビア出身の人物にはこの仕事はできないだろうということであった。

なおプリビーチェヴィッチの内相就任は条件付きであった。それは、旧セルビア王国の領域に関しては、法相のトリフコヴィッチが、プリビーチェヴィッチと協議の上で、内務行政を担当するというものであった。プリビーチェヴィッチは内相として法令に署名する権限を有するが、旧セルビア王国内の内務行政に限り、その主導権は法相のトリフコヴィッチにあった。以上、Hrvoje Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995, p. 66、による。つまり、プリビーチェヴィッチの内相としての排他的な管轄権は、主として旧オーストリア＝ハンガリー地域に限定されていたのである。セルビア側はこのようにして自国の内務行政の管轄権を確保していた。プリビーチェヴィッチはセルビア人とはいえ、旧オーストリア＝ハンガリー地域の出身者であった。そのような人間がセルビアの警察機構や選挙の実施を管理することには、与野党を問わずセルビアの政治指導者には大きな抵抗があったということであろう。

¹¹ 1918年11月初め、スイスのジュネーブでコロシェッツら国民評議会の代表とユーゴスラヴィア委員会議長のトルムビッチらは、セルビア政府を代表するパシッチならびにセルビ

ア野党代表と、統一国家の形成について協議をおこない、ジュネーブ協定といわれる合意文書を作成した。ところが、パシッチはこの協定の署名を数日後に撤回した。そのときに国民評議会代表や野党代表に対しておこなった説明が、王位代行者のアレクサンダル皇太子がジュネーブの合意文書に裁可を与えていないということであった。しかしながら、アレクサンダルはこの文書の存在を知ったのはもっとあとのことであり、パシッチの説明は明らかに事実に反していた。アレクサンダルの詰問はこのことに関係していた。

¹² Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, pp. 256-257.

¹³ *Ibid.*, p. 257.

¹⁴ Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 39.

¹⁵ 閣僚の名簿は次の通り。首相ストヤン・プロティッチ（急進党）、副首相アントン・コロシェツ（スロヴェニア人民党）、外相アンテ・トルムビッチ（ユーゴスラヴィア委員会）、内相スヴェトザール・プリビーチヴィッチ（「クロアチア人・セルビア人連合」）、法相マルコ・トリフコヴィッチ（急進党分派指導者）、財務相モムチロ・ニンチッチ（急進党）、教育相リュバ・ダヴィドヴィッチ（独立急進党）、農業相ジフコ・ペトリッチ（スタルチェヴィッチ権利党）、宗教相トゥゴミール・アラウポヴィッチ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人）、国土・鉱山・森林相メフメド・スパホ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人）、商工相ストヤン・リーバラツ（国民党）、社会政策相ヴィトミール・コーラッチ（社会民主党）、交通相ヴェリスラフ・ヴーロヴィッチ（独立急進党）、建設相ミラン・カペタノヴィッチ（急進党）、食糧・国民経済相ミロエ・ヨヴァノヴィッチ（進歩党）、郵便・通信エド・ルキッチ（「クロアチア人・セルビア人連合」）、厚生相ウロシュ・クルーリャ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人）、国会開設準備・法律平準化担当相アルベルト・クラマー（ユーゴスラヴィア民主党）、国防相ミハイロ・ラシッチ（セルビア王国軍将軍）、無任所担当相ミロ斯拉ヴ・ライチェヴィッチ（モンテネグロ代表）。

¹⁶ *Ibid.*, p.40.

¹⁷ 「ナブタク」については、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, pp. 127-128; Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, pp. 223-224; Ljubo Boban, *Hrvatske Granice od 1918 do 1991 godine*, Školska Knjiga, Zagreb, 1992, p. 14、を参照。

¹⁸ Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 41.

¹⁹ *Ibid.*, p. 30.

²⁰ *Ibid.*, p. 41.

²¹ *Ibid.*, p. 51.

²² この経緯は明らかではない。しかし、興味深い事実は、国民評議会内部の議論では、セルビア憲法の一部を統一国家の全地域に拡大適用する案に対して、次期内相のスヴェトザール・プリビーチヴィッチが反対の立場を表明していたことである。プリビーチヴィッチはこう述べた。セルビア憲法から一部分だけを取り出して他の地域にも適用することは不可能である。なぜなら、このような条項の実施を保障する行政機関、裁判所などが他の地域には存在しないからである。プリビーチヴィッチの意見は国民評議会を代表する見解とはならなかった。しかし、注目されるのは、後に社会政策相として入閣するヴィトミール・コーラッチが、このような事柄はまもなく成立する新政府の決定に委ねられるべきだと述べていたことである。以上、Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 51 の注記による。

²³ *Ibid.*, p. 53.

²⁴ *Ibid.*, p. 52.

²⁵ 事の真相は、その 52 条が王位の長子相続を規定していたからであった。摂政アレクサンダルは王位継承者として認められていたが、国王ペータル 1 世の長子ではなかった。国王ペータル 1 世の長子はジョルジェ皇太子であり、国王ペータル 1 世は彼を廃嫡にしていた。臨時憲法が施行されるとこの点で問題が指摘される可能性があった（*ibid.*, p. 53.）

²⁶ *Ibid.*, pp. 60-61.

²⁷ 1919年2月15日、サラエヴォでおこなわれた「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人の民主国家創造党」の結成集会での冒頭演説の中での発言による。同党はプリビッチェヴィッチが立ちあげた新党であった（Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 285.）

²⁸ Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca.*, p. 61.

²⁹ *Ibid.*, pp. 52-53.

³⁰ *Ibid.*, p. 61.

³¹ *Ibid.*, p. 62.

³² 一つのきっかけは、それまでプリビッチェヴィッチと緊密な協力関係にあったヴォイヴォディナのセルビア人グループが彼に相談することなく、急進党に合流したことにあった。プリビッチェヴィッチは自他ともに認める旧オーストリア＝ハンガリー領のセルビア人の指導者であったが、この事件は急進党に対するプリビッチェヴィッチの影響力を低下させることにつながったといわれる（Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 155）

³³ Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, pp. 72-73. なおユーゴスラヴィア民主連盟とは、1918年10月にパリでユーゴスラヴィア委員会とセルビアの野党の代表が結成したゆるやかな連携組織であった。彼らは、プリビッチェヴィッチと同様に単一国民の形成を最終目標とし、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の漸進的な融合一体化を求めている。ただし、統一国家の国家制度に関しては、彼らは、プリビッチェヴィッチと同様に単一の国家を前提としていたが、極端な中央集権主義を否定し、共通事項の処理のみを統一国家の仕事とし、地方政府の自治権の維持を支持する立場をとっていた。

³⁴ ボスニアの急進党に所属するセルビア人グループは、1919年の1月以来、民族主義的な運動を強めていた。彼らは、1月27日のセルビア正教の祝日にサラエヴォで集会を開き、ボスニアとセルビアとの統合を宣言することを計画していた。これに反発したクロアチア人グループは、クロアチア人の政治集会を計画していた。事態を憂慮したボスニア政府は内相のプリビッチェヴィッチに連絡し、両民族の集会を禁止する決定を出すよう求めた。セルビア人民族主義者の動きを抑えるにはベオグラード政府の権威を借りるしかないと言ったボスニア政府は判断したのである。これに応じてプリビッチェヴィッチはただちにセルビア人、クロアチア人双方の集会を禁止する決定を出した。彼はボスニア政府に次のように述べた。ボスニアのセルビアへの併合を求める運動は有害無益でしかない。国家統合はすでに宣言され、統一国家は出来上がっている。その上でそのような行為をおこなえば、クロアチア人グループの反発を招き、国民の一体化を弱め、国益を損ねるばかりか、国外にも悪い印象を与えかねない。プリビッチェヴィッチはボスニア政府にこう指示した。セルビア人グループの指導者ミラン・スルシュキッチを政府内に呼び、過激な行動を慎み、中央政府の政策に反するような決議をけっして採択しないように指導せよ。さらにプリビッチェヴィッチは、近く自らサラエヴォを訪問する予定であることを伝えた。

ここで注目されるのは、国家行政の中央集権化の問題とセルビアとの一体化の問題は区別して考えなければならないと、プリビッチェヴィッチがボスニア政府議長のアタナシヤ・ショーラに説いていることである。セルビア人民族主義者のグループは、プリビッチェヴィッチが進めている中央集権化政策をセルビアとセルビア人が支配する体制の構築と同一視していた。しかし、プリビッチェヴィッチはそのような混同をきっぱりと排除する必要があると考えていたのである。プリビッチェヴィッチは、セルビア人グループが計画していた1月27日の集会を中止させることに成功した。ところが、彼らは2月初旬にサラエヴォで集会の開催を強行した。そこでの演説の中で、セルビア人グループの指導者スルシュキッチは、地方自治はなくなり、すべてはベオグラードが指示するようになったと強調し、自らの演説を「大セルビア国家万歳」と結んだ。彼らの考えはプリビッチェヴィッチのそれと依然大きな開きがあった。以上、Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 69. による。

³⁵ このあとスルシュキッチは、同年4月には民主党を去り急進党に復党した。

³⁶ 集会には次の政党、政治グループが参加した。クロアチアおよびスラヴォニアからは「クロアチア人・セルビア人連合」、グループ「SHSの声」、ユーゴスラヴィア民主同盟、ダルマチアからは独立のクロアチア人グループ、スロヴェニアからはユーゴスラヴィア民主党、ヴォイヴォディナからは一足先に発足した民主党のヴォイヴォディナ支部組織、ボスニア・ヘルツェゴヴィナからはムスリム進歩民主党、急進民主主義前進党、ムスリム・ユーゴスラヴィア民主主義党、クロアチア国民連合、バーニャ・ルーカ地域組織、ムスリム・グループ「時代」。

³⁷ *Ibid.*, pp. 283-284.

³⁸ *Ibid.*, p. 285.

³⁹ これに応じなかったのは、クロアチア国民連合とムスリム・グループ「時代」のみであり、いずれもボスニア・ヘルツェゴヴィナの政治グループであった。

⁴⁰ プリビーチェヴィッチとダヴィドヴィッチの確執は、単に個人的な気質の相違ではなく、旧オーストリア＝ハンガリー領出身の政治集団と旧セルビア出身の政治集団の政治的志向の違いを反映したものであった。両勢力は、ユーゴスラヴィア主義に立ち、単一国家と中央集権制の樹立を基本政策とする点で一致していた。しかし、ダヴィドヴィッチら旧セルビア出身の政治集団は、民主党員である前に反急進党勢力であった。セルビアの野党勢力を前身とする彼らは、急進党に対抗して政権をとることが民主党の使命だと考えていた。したがって、政権獲得のためには、ときとして基本政策よりも戦術が重要であると彼らは考えた。そこから政権をとるためには、基本政策の点で妥協や譲歩をおこない、敵の敵は味方だというスタンスで、支持を広げることも必要だと考えた。たとえば、ダヴィドヴィッチはより穏健な政治手法を好み、のちに中央集権制を緩和して、ステパン・ラディッチと交渉する用意があることを示した。これに対して、プリビーチェヴィッチとその支持者にとっては、党の基本政策は、絶対的な目標であり、政治活動の原則であった。したがって、基本政策を棚上げにして、譲歩や妥協をおこなうようなことは考えられなかった。また目的を達成するにはどのような手段も辞さないというのが彼らの政治姿勢であり、それはしばしば強権的な政治手法の発動につながった。

もっとも、民主党が発足してしばらくの間は、プリビーチェヴィッチとダヴィドヴィッチは、急進党に対抗して党の団結を固める必要上、あからさまな衝突を避けていた。

⁴¹ ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の中央委員会がおこなった決議は、プリビーチェヴィッチ新党の掲げる単一民族主義を念頭において、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人が独自の政党を結成した理由をこう説明している。「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいてムスリム人、セルビア人、クロアチア人のそれぞれが有する宗教的信仰は歴史的に条件付けられたものであり、それによってムスリム人、セルビア人、クロアチア人はそれぞれ、文化的、社会的、政治的に独自の個性を発展させてきた。したがって、プリビーチェヴィッチが構想するように、一つの政党の結成によって、文化的にせよ政治的にせよ、人びとが統一的な観点をただちに共有できるようになると考えるのは幻想である。そのような目標は、時間をかけて相互に寛容な精神で取り組むことによって初めて達成可能であろう」。以上、Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 82 による。

⁴² 臨時国民議会の召集は当初の予定よりもかなり遅れた。臨時国民議会は、1918年12月3日にベオグラード滞在中の国民評議会の代表団が出した決議によれば、新内閣の組閣後、遅くとも1ヶ月以内に召集されることになっていた。それは12月22日の政府の初閣議でも確認されている。この方針にしたがえば、臨時国民議会は、翌年の1月下旬には召集されているはずだった。ところが、1月を過ぎても臨時国民議会は開かれなかった。実は、臨時国民議会は、遅くとも3月1日に招集することで政府とセルビア議会は話し合いがついていた。これは、1919年1月3日の協議の結果であった。ところが、この事実はしばらくの間伏せられていた。予定の期日を過ぎても臨時国民議会が召集されないことに、スロヴェニア人やクロアチア人は苛立った。政府系通信社が確かな筋の情報として3月1日の議会召集を伝えたのは2月13日であり、これを政府が正式に裏付ける発表をしたのは2月

22 日であった。

⁴³ 辞職の理由は、一つにはボスニア・ヘルツェゴヴィナでの臨時国民議会の代表の選出に際して、ムスリム人代表が公正に選出されなかったこと、もう一つは臨時国民議会の運営規定としてセルビア議会の運営規定が賛否を明確に問うことなく拍手で採用されたことへの抗議であった。前者については、プリビーチェヴィッチの新党に入党したムスリム人の政治集団は7名の議員を獲得したのに対して、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人の大多数を代表する政党JMO（ユーゴスラヴィア・ムスリム組織）は2人の議員を確保しただけであった。しかも、これは旧国民評議会の代表は自動的に臨時国民議会の代表資格を得るという国民評議会の申し合わせにもとづく配分であり、JMOに対する配分ではなかった。つまり、プリビーチェヴィッチ派が取り仕切ったボスニア・ヘルツェゴヴィナの政党間の話し合いでは、JMOは一人の議員も確保できなかった。いいかえると、JMOはボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人の代表組織として認知されなかった。スパホはこの点を強く抗議したのである。

⁴⁴ 臨時国民議会の当初の定員は296であった。しかし、議会の欠席を表明した者や議員資格を無効とされた者いたので、1919年4月の時点では議員数は290であった。さらにこのあと死亡した者や議員を辞職した者が続出し、他方補充もおこなわれなかったため、議員数は減少した。投票数でみると、議員数は254人から287人であった（Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 91）。政党別の構成も一定ではないが、1919年8月の時点では、民主連合113、急進党69、国民クラブ29、ユーゴスラヴィア・クラブ20、社会民主党13、モンテネグロの諸派10、独立急進党6、自由党5、ヴォイヴォディナの諸派5、その他19であった（*ibid.*, p. 116）。

⁴⁵ この法律の施行日は4月10日であったが、警察が彼らを逮捕したのはこの法律が発効する以前の3月21日であった。その後の臨時国民議会の質疑の中で、スタルチェヴィッチ権利党の議員マツコ・ラギーニャがこう質問した。「クロアチア議会の議員資格をもつラディッチがどうして必要な手続きもなしに逮捕され、拘禁されているのか」。これに対して、プリビーチェヴィッチは、国家と王朝に対する侮蔑が逮捕の理由であり、もし自分の責任が問われるとすればそれは逮捕が遅れたことだとまで述べた。ラディッチらには、発効日のあとにこの法律が適用されることになったのである。以上、Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 125 による。

⁴⁶ *Ibid.*, pp. 123-124.

⁴⁷ これと関連して、注10で述べたように、プリビーチェヴィッチの内相就任は、その指揮権を旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域に限定することで、急進党指導部は承認したのであった。

⁴⁸ Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 166.

⁴⁹ Engelsfeld, *Prvi Parlament Kraljevstva Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 127.

⁵⁰ 争点は、ゼネストを計画していると伝えられる共産主義者に対する対応であった。ポリシェヴィズムは力で抑え込むべきだと主張するプリビーチェヴィッチに対して、スロヴェニア人閣僚である副首相のコロシェツおよび社会政策相のスティニチャールは、寛容な態度で臨むことを主張した。プロティッチは調整案を出したが、閣内で多数を占めるプリビーチェヴィッチらはこれを受け入れなかったため、二人は辞任を申し出た。しかし、共産主義者の活動が活発化し、国家の脅威となっているこの時期に内閣を改造するのはよくないとプロティッチは判断して辞表を受理せず、ユーゴスラヴィア・クラブの決定にもとづいて、二人は辞表を撤回した（*ibid.*, p. 127）。

⁵¹ クロアチア共同体は、クロアチア人のブルジョアジーや知識人を代表する政治集団の連合組織であり、プリビーチェヴィッチの中央集権化政策に反対すると同時に、ラディッチらの農民運動に対抗する意図をもっていた。クロアチアのブルジョア政党は、クロアチア大衆農民党が勢力を拡大して、自分たちの存立基盤を脅かし始めたことに脅威を感じ、大同団結を図ったのであった。

⁵² 内相に就任したプリビーチェヴィッチが最初に行った仕事は、1万2000人もの憲兵の増員であった (Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 66)

⁵³ Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 174.

⁵⁴ この点詳しくは、拙稿『『スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家』の成立と崩壊』、『社会文化研究』(広島大学総合科学部紀要II) 第29巻、2003年、34-35頁を参照。

⁵⁵ Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 142.